

国際仏教学大学院大学研究紀要  
第 23 号 (平成 31 年)

Journal of the International College  
for Postgraduate Buddhist Studies  
Vol. XXIII, 2019

シュナッハシエーパ物語試訳  
(AB VII 13-18 ~ ŚāṅŚrSū XV 17-27)

後 藤 敏 文



## シュナッハシェーパ物語試訳 (AB VII 13-18 ~ ŚāṅŚrSū XV 17-27)

後藤 敏文

「シュナッハシェーパの物語」Śaunaḥśepam は古代インドの言語、社会、思想展開を理解する上で重要な資料であり、二次文献における引用検討は多岐多数に上る。ここでは原典に忠実な翻訳提示の試みを第一義とする。伝承には Aitareya-Brāhmaṇa [AB] VII 13-18 と Śāṅkhāyana-Śrautasūtra [ŚāṅŚrSū] XV 17-27 とがある。異同は少ないが、後半の散文部分には読み相違が多い(→ n.81)。Rājasūya 祭(王位聖別儀礼)においてホートリ(hótar-/hóty-)祭官が読み上げるため、ホートリの職を司るリグヴェーダ[RV]学派の両文献に編集固定されて収録されたものである。辻直四郎『古代インドの説話—ブラーフマナ文献より—』春秋社 1978, 3-16 に、信頼すべき概要と詳細な研究史が挙げられ、翻訳と注記とがあるので参照されたい。<sup>1</sup> 以下、過去に行った授業用の資料を基に、ヴェーダ散文を読む際に有用と思われる情報を注記に盛り込むよう心懸ける。日本語表現の多様な可能性を利用してできるだけ原文の姿を浮かび上がらせるべく、そのため、例えば、複数形を明示するために「...たち」を多用するなど、日本語

<sup>1</sup> 特に, STREITER Diss. (1861), BÖHTLINGK-GARBE (1909), WELLER Die Legende von Śaunaḥśepa (1956), LOMMEL ZDMG 114 (1964) 122-161, RAU AsS 20 (1966) 94-96 (VII 15 まで), German Scholars on India I (1978) 213-215 (同)。ROTH は既に 1850 年, AB 版の全訳を公表した。HORSCH Vedische Gāthā- und Śloka-Literatur (1966) 78-103 には gāthā 部分が扱われている。以後の研究に, 松濤誠達『大正大学研究紀要』67 (1982) 1-18, FALK ZDMG 134 (1984) 115-135, SÖHNEN Fs.Risch (1986) 190f. があり, WINDISCH Buddha's Geburt und die Lehre von der Seelenwanderung, Leipzig (1908) 60f. にも参照すべきところがある。

としては奇妙な場合があることに理解を乞う。

## 1. 翻訳

### AB VII 13 (～ ŚāṅŚrSū XV 17)

(1) Vedhas の子, Ikṣvāku 家の, Hariścandra は息子をもたなかった。<sup>2</sup> 彼の妻は 100 人に達していた。それらの [妻] において<sup>3</sup> [彼は] 息子を得なかった。彼の家に Parvata と Nārada とが滞在していた。彼は Nārada<sup>4</sup> に尋ねた。

(2) さてこの息子 [というものを],  
解る<sup>5</sup> 者たちも, [解ら] ない者たちも, 求めているということは,  
何を, いったい, ひとは息子によって手に入れるのか,

<sup>2</sup> あるいは, 「Vedhas の子, Ikṣvāku 家の, Hariścandra [という] 息子をもたない王があった」とも。「個人名一父親名一家系名」は正式な名乗りの形式に従う。アケメネス朝ペルシアのダリウス王も「*dārayavaus*, 大王, 諸王の王, パールサの王, 諸邦の王」に続けて, 父名 (*vištāspahya puça*) 祖父名 (*aršāmahya napā*) 家系名 (*haxāmanišiya*) をもって自称する。全体は *ha* + Perf. の語りのテンスを用いて語られる *itihāsa* 「であったとさ」文学である (→ n.59)。DELBRÜCK AiSynt. 499-501 参照。*aikṣvāka-* は *ikṣvākū-* (RV X 60,4+) から, *vṛddhi* 形成によって作られた名詞「Ikṣvāku 家の」。本来期待される *\*aikṣvākava-* からの省略形と説明される (AiG II-2 129)。アクセントは ŚB XIII 5,4,5 により *aikṣvākā-* と確かめられる (ただし, Ed. Kalyan-Bombay は *āikṣvāka-* とする)。伝統文法におけるアクセント位置の揺れについては AiG II-2 135 参照。Ikṣvāku 家は Pūru の一族と思われ, RV 同箇所以来散見。後に Ayodhyā の王家とされる。Ikṣvāku 家と Bhārata との関係ないし争いについては, MACDONELL-KEITH II 12, s.v. Pūru; WITZEL Fs.B.R.Sharma 189f. 参照。—— *vaidhasa-* は *vedhās-* からの *vṛddhi* 派生である。*vedhās-* には諸解釈があるが, Gotō in WITZEL-Gotō は 'mündig, vertrauenswürdig' 「一人前の, 頼りになる」を採る; aav. *vazdah-* 'beständig' 参照。Cf. MAYRHOFFER EWAia s.v. (Lit.).

<sup>3</sup> *tāsu putram na lebhe* の Lok. *tāsu* は *jan<sup>i</sup>* の構文を予想させる, OERTEL Kasusvariationen II 6-28 = Kl.Schr. 1016-1038 参照。→ n.21, n.27.

<sup>4</sup> *nār-*, *nāra-* 「男児」と *-da-* 「(を) 与える」の (通俗) 語源が背景に推測される。

<sup>5</sup> *vijānanti* 「解る」は目的語を伴わない絶対用法 (absoluter Gebrauch), 「理解力がある」の意。

それを私に, Nārada よ, 語れ。<sup>6</sup> (G1)

(3) 彼 (Nārada) は一つの [歌 *gāthā*] をもって尋ねられると, 10 の [歌] をもって答えた。

(4) 負債を彼 (息子) の上に寄せ集める,<sup>7</sup>  
そして, 不死であることに至る,<sup>8</sup>  
父が, 生まれた (ばかりの) 息子の  
生きている顔を見ることができれば。 (G2)<sup>9</sup>

(5) 大地にどれだけの享受たちがあるとしても,  
どれだけ, 火に,  
どれだけ, 水たちに, 生き物たちにとって, ——  
それよりも多い, 息子において父にとっての [享受は]。<sup>10</sup> (G3)

(6) 引き続き, 父祖たちは息子によって,  
分厚い闇を越えて行つた (または: 来た)。<sup>11</sup>

<sup>6</sup> ŚānŚrSū *naḥ prabrūhi* 「われわれに公言せよ (教えよ)」。 *yan nu...* (+ *kim svit*) の構文については AiSynt. 517 の例が参考になる。

<sup>7</sup> つまり, 彼に (父祖たちに負う) 借りを託して弁済する。ひとが神々, リシたち, 父祖たち, (および, 人々) に負う 3 (ないし 4) の負債については, 辻『説話』150f. 参照。 *ṛṇam* + *sam-naya-* については, RV VIII 47,17 および GELDNER z.St. 参照 (: ... の上に寄せ集め, 自分は債務なしとなる。息子が担う)。

<sup>8</sup> 息子 (子孫の連続) による死後の世界の確保。

<sup>9</sup> G2 = VāsDhSū XVII 1, ViṣṇuSmṛ XV 45。ab については ManSmṛ IX 107 参照。

<sup>10</sup> PW V 382 s.v. *bhoga*, さらに ŚB XIV 4,1,3 ~ BĀU-K I 3,2 *yó vācī bhógaḥ* 「ことば (発語機能) における有用性」; *yāḥ prāṇé bhógaḥ* 同 4 ~ 同 3 参照。あるいは, *bhoga-* のもとの意味「... を役立たせること」を重く考えれば, Lok. (*pr̥thivyaṃ, jātavedasi, apsu, putre*) によって目的の Gen. を置き換え (「... を役立てる」。 *prāṇi-nām* は, この場合, 主語の Gen.) 明瞭化を計った構文とも解釈できる, つまり, 「生き物たちが, 大地において享受たち [を得る] としても (大地をどれだけ役立たせるとしても), ... 父が息子において [得る享受は] それよりも多い」。

自分自身が自分自身から生まれたのだから。<sup>12</sup>

[息子は] 渡り越える *sairāvati* [の舟]<sup>13</sup> である。(G4)

(7) 垢がいったい何だ（何になる）。毛皮が何だ。

また、髭（たち）が何だ。苦行が何だ。<sup>14</sup>

<sup>11</sup> *śaśvat* + Ip. については Pāṇ III 2,116 参照: *ha* 「つまり」, *śaśvat* 「引き続き」とともに用いられる場合には、経験していない過去 (*parokṣe*) を表す Perf. に代わって Ip. の使用が可能。

<sup>12</sup> Cf. Jātaka 487 (Uddālaka-Ja) G5 *yena jāto sa yeva so*. あるいは「[息子は] 自分自身として自分自身から...」。

<sup>13</sup> AB, ŚānŚrSū とともに *sa irāvaty atitāriṇi*. 名詞構文の主語が代名詞の場合、代名詞の性・数は述語名詞のそれに一致するので (Kongruenz, concord, agreement, 後藤『紀要』21, 54f. n.27 に AiSynt. 90, 565 ほか文献提示あり), 男性形 *sa* は無理である。おそらく, <sup>+</sup>*sairāvati*-「遠洋航海用の (?)」から崩れたものであろう (<sup>+</sup>*sairāvaty atitāriṇi*<sup>+</sup>). *sairāvatiṃ nāvam* AB VI 21,10 参照。その場合, *ai* が既に *ai* と発音されていたことを示唆する: cf. G29 *ma upetā* --- (二重 sandhi と謂われることがあるが, *āu* が既に *au* の発音に移行していたものであろう, → n.132. 後藤『紀要』21, 51 n.19 (ŚvetU III 2 *ya imām* ---) などを参照。KLAUS Wasserfahrz. 22f. および n.105 は別の見解を述べる。*irāvati*-の読みは、天界に続くと言われる Indus の支流 Irāvati (Ep. +) を想定したことに起因するか。

<sup>14</sup> AV XI 5,6b (Brahmacāriṇ) *kārṣṇaṃ vāsāno dīkṣitō dīrghāśmaśruḥ* 「黒 (レイヨウ) の [毛皮] を身に纏い、潔斎して、髭を伸ばし」。Cf. Dhammapada 393 *na jaṭāhi na gottena* | *jaccā hoti bārahmaṇo* | *yamhi saccaṇ ca dhammo ca* | *so sucī so ca brāhmaṇo* || 394 *kin te jaṭāhi dummedha* | *kin te ajinasāṭiyā* | *abbhantaraṃ te gahanaṃ* | *bāhiraṃ parimajjasi* 「結髪によって、家門によって、生まれによって、婆羅門になる (または: である) のではない。その者の中に真実と法があれば、その人は清く、その人はまた婆羅門である。君の結髪が何になる、知恵の劣った者よ、君の皮革の衣が何に。君には内側に藪があり、外見を磨きあげている」。ただし、苦行者批判ではない: 395 *paṃsukūladharaṃ jantuṃ* | *kisaṃ dhamanisanthataṃ* | *ekaṃ vanasmiṇ jyāyantaṃ* | *taṃ ahaṃ brūmi brāhmaṇaṃ* 「糞掃衣を身に帯びる人が、瘦せて静脈が広がり、独りで園林に静慮しているならば、その人を私は婆羅門と言う」。Cf. MS IV 8,1<sup>v</sup>:107,9f. (= KS XXX 1:182,6f., KpS XLV 4:<sup>2</sup>327,12f.) *kiṃ brāhmaṇasya pitāraṃ* | *kiṃ u pṛchasi mātāraṃ* | *śrutāṃ céd asmiṇ vedyam* | *sā pitā sā pitāmahāḥ* 「何のために婆羅門の父を、何のために、また、母を君は尋ねるのか。当人の中に知られるべきことが学ばれてあるとしたら、それが父、それが祖父だ」

（自分の）息子を、婆羅門学者たちよ、望め。  
それが議論を越えた世界<sup>15</sup> なのだ。（G5）<sup>16</sup>

（8）食物はつまり氣息（いのち）である。衣服はつまり〔身を〕護るものである。

黄金はよき外見，家畜たちは〔娘を〕嫁がせるもののものたち。  
妻はつまり仲間（つれあい）<sup>17</sup> である。娘はつまり嘆きの基である。  
息子は，つまり，最上の天穹において，光である。（G6）<sup>18</sup>

（9）夫は妻に入り込む，  
胎児となって，彼は，母に。  
彼女の中で，再び，新しい〔人〕となって，<sup>19</sup>  
十番目の月の〔過ぎた〕後，<sup>20</sup> 生まれる。（G7）

（参考：GELDNER ad RV X 135: p.365 上，HORSCH Gāthā 466 脚注，辻『論集』277，『説話』56）。—— 西村『論集』43（2016）180f. n. 12 参照。

<sup>15</sup> この時代の議論においては，*loka-* は「存続する，死後の世界」，「来世（*para-loka-*）」の意味で用いられることが多い。G4 の「闇」と対比されて *loka-* には「光りのある空間」という原義が生きている可能性がある，cf. G6 *jyotiṣ* 「光」。ここでは，*'vadāvadaḥ* 「議論を重ねるまでも無い」と解した。HOFFMANN（口頭）は *vadāvada-* 'das plappernde [Kind]'（しゃべりまくる子）の可能性を示唆。

<sup>16</sup> G4，G5 については，後藤『印度学仏教学研究』43-1（1994）483 と注 21，22 参照。

<sup>17</sup> m. *sakhā* であって，f. *sakhī*-「女の同僚，ご学友」でないことにも注意。

<sup>18</sup> （学者，苦行者に対比させて）一般生活者日常の徳を称える。a は *ha* 「つまり，即ち」を用いて線対称構文になっている。b を順序を入れ替えた線対称構文と解した。単なる列挙とも，「黄金，家畜たち，結婚式たちは（栄えある）姿である」などとも解釈可能。*duhitā* は 2 音節，*/dhitā/* < \**d<sup>h</sup>uitā* < *duhitā*，GRASSMANN の法則の背後にある 1 語中に 1 帯気音の存在への意識の上に，早口発音による特別な変化が加わったものと考えられる，パーリ語 *dhītā* 参照。AB VIII 22, 6<sup>v</sup> *duhitṛṇām* も 3 音節である，LÜDERS Phil.Ind. 497-509 参照。

<sup>19</sup> cvi 形 *navī-bhūtā* 「新しくなって」ではなく，*navo bhūtā* 「新しい〔人〕となつて」。ŚānŚrSū は Abs. + *atha* の構文をとる（cf. AiSynt. 409, OERTEL, Syntax 8, MINARD Trois énigmes II 71-74, HOFFMANN Aufs. 369, 辻『説話』13f. n.5）。

(10) その時、妻 (*jāyā*) は妻 (*jāyā*) となる、  
[彼が] 彼女の中に再びつくられるき。

発生<sup>21</sup> とはこれが発生である<sup>22</sup>。

種子がこの時（この発生によって）中に置かれる。(G8)

(11) 神々と聖仙たちが、偉大な光熱力を  
彼女として<sup>23</sup> 集めしつらえた。

<sup>20</sup> AiSynt. 117f. (例えば, RV X 184,3 *daśamē māsi sūtave* 「10 番目の月の後に産むように」); R. SCHMITT Fs.Pisani II 903ff. 参照。

<sup>21</sup> これを引き継ぐ文に ManSmṛ IX 8 がある: *patir bhāryām sampraviśya | garbho bhūteha jāyate | jāyāyās tad dhi jāyātvaṃ | yad asyaṃ jāyate punaḥ* 「夫は妻に入り込み、胎児となって後、この世に生まれる。彼女の中に再び生まれること、それこそが妻 (*jāyā*) の妻 (*jāyā*) たる所以である」。*jan*<sup>i</sup> 「児を作る」の構文については OERTEL Kl.Schr. 1016-1038, 母の Lok. については同 1036 参照, → n.3, n.27。

— Cf. AV XI 4,20 *antār gārbhaś carati devātās<sub>uv</sub> | ābhūto bhūtāḥ sā u jāyate punaḥ | sā bhūtō bhāvyaṃ bhaviṣyāt | pitā putrām prā viveśa śácibhiḥ* 「胎児は神格たち（生体諸器官 *prāṇāḥ*）の間を動き回る。[母胎の中に] 発生し (*ā-bhūtaḥ*) , [具体的個体として] 生じると (*bhūtāḥ*) , 彼は再び生まれる。それ (胎児) は, [個体として] 生じると (*bhūtāḥ*) , まさに生ずべきもの, 将来生ずるものを管轄 (支配) する (後藤『印度学仏教学研究』55-2, 2007, 809-805, および Gs.Elizarenkova 115-125 が扱う *śālām as* 構文を参照, cf. n.130)。父は能力ある [神格たち=生体諸器官] を伴って, 息子の中に入り込んだ (そして今そうある) , または, 「...将来生ずるもの (*bhaviṣyāt*, 即ち, 精子 *rētas*- または *bīja*-) として生ずることになる。父は...」。後藤『印度哲学仏教学』24, 2009, 37 n.38 参照。WINDISCH Buddha's Geburt 61 n.1, J. SAKAMOTO-Gorō Erlanger Tagung (2000) 485 n.48, 西村『論集』36 (2009) 97f. n.11 参照。

<sup>22</sup> つまりこの (世俗的) 営みが。 *ābhūti*- は, *ābhū*- 「空の」 (cf. RV X 129,3, 「Nāsadāsitya」讃歌) + *-ti*- 「この (周知の) 空っぽなこと (cf. *ūnā*-) が」, 「この生成力が能力 (cf. *anu-bhū*-) である」, 「この生成は空虚の助け (*ūti*-) である」, 「この生成は無生成 (*ābhūti*-) である」などとも解釈可能か。WINDISCH Buddha's Geburt 61 n.1 参照。

<sup>23</sup> 「彼女を光熱力として」ならば *etām* に代わって *etad* が期待される (名詞構文においては, 論理的主語が代名詞である場合, その性数は述語名詞のそれに一致する (Kongruenz, concord, agreement, → n.13)。ただし, 意味が不明瞭になるのを避



神々は人の子たちに言った：

これ（彼女）が君たちにとって、再び、生み作る者（女）である。

(G9)<sup>24</sup>

(12) 息子のいない者には（来）世（*loka-*）は存在しない。

そのことを獣たちは皆知っている。

それ故、また、息子は、母にも

妹（姉）にも乗る。(G10)

(13) これが、歩幅広く歩める、馴染み深い<sup>25</sup> 道である、

息子に恵まれた者たち（*putrīṇ-*）が憂いを離れて立ち入るところの。

それ（この道）を獣たちも鳥たち〔も〕目にしている。

それ故、彼らは母とさえ番となる。(G11)

---

けたとも、また、そもそもそれ故に、この言い回しにしたとも考えられる。おそらく、「*tejas-*を彼女へと集め設えた、*tejas-*を集めて彼女を作った」の意、cf. AiU II 1 *yad etad retas tad etat sarvebhyo 'gebhyas tejah sambhūtam* 「この *retas* なるもの、それはこの、すべての身体部位から生成した光熱力である」、cf. WINDISCH Buddha's Geburt 61. BĀU IV 4,1 *tejomātrāḥ* 「光熱〔から成る〕構成要素」。父母は肉体部分（とその機能、およそ *téjas-* に当たる）をもたらし、*ātman-* 自体は天界から下降（*ava-kram*）して胎内に至るとも解される。西村『論集』36（2009）, (69)–(93), 特に (83)ff 参照。

<sup>24</sup> ŚānŚrSū はこの後に AB G11 への異読をもつ：「これが、張り展げられた神々の通る道（祖霊として天界に到り、天界から戻る、いわば母への道）である、それを通して、憂いを離れた、息子に恵まれた者たちが辿り来るところの。それ（この道）を獣たち、鳥たちは目にしている。それ故、彼らは母とさえ番をいたす」。ŚānŚrSū *yena ākramante* 「それを通して（道の Instr.）たどりゆく」に対し、AB は *yam ākramante* とする。「... (Akk.) に足を踏み入れる」と解したが、彼らの辿ったところが道をなすという、一種の *Inhaltsakkusativ* の可能性も考えられるか。

<sup>25</sup> *suśeva-* を「馴染み深い」と解した、cf. Indra の誕生に際しての母のことは：RV IV 18,1 *ayām pānthā ānuvittāḥ purāṇāḥ* 「これが昔からの踏襲されてきた道だ」。あるいは「大事にすべき、大切な」とも。

と、彼に語ったのち、<sup>26</sup>

## VII 14 (～ ŚānŚrSū XV 18)

(1) 次に、当人 (Hariścandra) に [Nārada は] 言った、「王 Varuṇa にすがれ、『私に<sup>27</sup> 息子が生まれよ。その [息子] によって君を祭ろう』と [言つて]」[と]<sup>28</sup>。

(2) 「そう [しよう]」といって、彼は王 Varuṇa にすがった、<sup>29</sup>「私に息子が生まれよ。その [息子] によって君を祭ろう」と [言つて]。「そう [しよう]」と (Varuṇa は言った)。彼に (Gen. → n.27) 息子が生まれた、Rohita<sup>30</sup> という名の。

(3) 彼に言った、「君に息子が生まれたのだ。<sup>31</sup> それによって私を祭れ」と。

彼は言った、「家畜は (生後) 10 日を超えた者となれば、すると、それは祭儀にふさしくなるのだ。10 日を超えた者で、まず、あれ。<sup>32</sup> そうしたら、

<sup>26</sup> *ha smā ākhyāya. ākhyāya* と Abs. で章が改められるのを (Perf. 語形との) 誤解に基づき、*hāsmāi* (*ha + asmai*) を *ha + sma* に中途半端に変えたものか。haplographisch に \**ha smāsmā*\* から崩れたとも。ŚānŚrSū 「と。彼 (Hariścandra) は言った、それなら私に言え、どうしたら私に息子が生まれうるかを、と。彼に (Nārada は) 言った」は標準的な姿に戻したものか。Cf. AUFRECHT 431,19 “grammatisches Ungestüm”, WEBER Ind.St. IX 314 (+ *hā 'smā* nach “ABC. und Müller”), BÖHTLINGK Chrestomatie<sup>2</sup> 22, Z.29, BÖHTLINGK BKSGW 1900 417f. Abs. + *atha* については、注 19 参照。

<sup>27</sup> *janī* 「児を作る」の構文については OERTEL K1Schr. 1016-1038, 当該箇所 of 構文については特に 1020 参照, → n.3, n.21.

<sup>28</sup> *iti* は二重には現れない。

<sup>29</sup> Suppletion (補完活用) に注意: Präs. *upa-dhāva-ti* :: Perf. *upa-sasāra* 「(助けを求めて *upa*) ... のもとへ走る」。→ n.70.

<sup>30</sup> 「赤い [者]」, AV XIII 1 Rohita 讃歌 (太陽の一アスペクトか), Suttanipāta [SN] I 30 Rohita という馬が Buddha に世界の涯てを尋ねる話、などが想起される。

<sup>31</sup> *ajani*: 直近過去 (aktuelle Vergangenheit, actual past) を表す Aor. であるが、同時に確認 (Konstatierung, statement) の意を含む。同様に *abhūt* (4), *ajñata* (5), *apatsata* (6), *ajñata* (7)。この部分, *sa*, *tam* は専ら Hariścandra 王を指し、神 Varuṇa を指示しない。一種の忌避か。

君を祭ろう」と。「そう [しよう]」と (Varuṇa は言った)。(4) 彼は 10 日を超えた者であった。彼に (Varuṇa は) 言った, 「10 日を超えた者と, 今やなったぞ<sup>33</sup>。それによって私を祭れ」と。彼は言った, 「家畜の歯たちが生えれば, すると, それは祭儀にふさわしくなるのだ。彼の歯たちが, まず生えよ。<sup>34</sup> そうしたら, 君を祭ろう」と。「そう [しよう]」と (Varuṇa は言った)。(5) 彼の歯たちが生えた。彼に (Varuṇa は) 言った, 「この者の歯たちが生えたぞ。それによって私を祭れ」と。彼は言った, 「家畜の歯たちが落ちれば, すると, それは祭儀にふさわしくなるのだ。彼の歯たちが, まず, 落ちよ。そうしたら, 君を祭ろう」と。「そう [しよう]」と (Varuṇa は言った)。(6) 彼の歯たちが落ちた。彼に (Varuṇa は) 言った, 「この者の歯たちが落ちたぞ。それによって私を祭れ」と。彼は言った, 「家畜の歯たちが再び生えれば, すると, それは祭儀にふさわしくなるのだ。彼の歯たちが, まず, 再び生えよ。そうしたら, 君を祭ろう」と。「そう [しよう]」と (Varuṇa は言った)。(7) 彼の歯たちが再び生えた。彼に (Varuṇa は) 言った, 「この者の歯たちが再び生えたぞ。それによって私を祭れ」と。彼は言った, 「王族の者は帯を締められるように<sup>35</sup> なれば, すると, 彼は祭儀にふさわしくなるのだ。彼は, まず, 帯締め (の年齢・儀) に達せよ。そうしたら, 君を祭ろう」と。「そう [しよう]」と (Varu-

<sup>32</sup> *nirdaśa*-. 生後直後の母乳 (*pīyūṣa*-. ) の重要性に基づく, 牧畜の概念が背景にある。TB II 1,1,3 (OERTEL Syntax of Cases 84 参照), さらに, BaudhDhSū I 5,12,9, ĀpDhSū I 5,17,24, GautDhSū II 8,22f., ManSmṛ V 8, YājñSmṛ I 170, ViṣṇSmṛ LI 39, ViṣṇuDhUPur III 230,9, MBhār XII 37,21 など。

<sup>33</sup> *abhūt* は *as* の Aor. を補う (Suppletion, 補完活用)。

<sup>34</sup> この辺りの観念の背景には犠牲獣に求められる完全さがある, cf. SCHWAB p. XVIII, 辻『説話』p.14 n.6 「最初の歯が抜け落ち, 二度目の歯が生えたとき (pan-nadat)」。

<sup>35</sup> *sāmnāhuko bhavati*-. *-uka*- 接尾辞による *sāmnāhuka*- と *vṛddhi* 派生形 *\*sāmnāhika*- とが混同された結果 (Kontaminierung) であろう, cf. AiG II-2 482. ŚānŚrSū は一貫して *sāmnāham prāpnoti* 「帯締め (の年齢・儀) に達する」。*sam-nah* は「帯を締める」(cf. FALK ZDGM 134 p.132 n.47) 意味にも, 「武装する」の意味にも用いられるが, いずれにしても王族階級の元服 (cf. 婆羅門階級の入門式) が意図されているよう。

ṇa は言った)。(8) 彼は帯締め (の年齢・儀) に達した<sup>36</sup>。彼に (Varuṇa) は言った, 「帯締め (の年齢・儀) に, 今や達したぞ<sup>37</sup>。それによって私を祭れ」と。彼は「そう [しよう]」と言って, 息子に語りかけた<sup>38</sup>, 「坊や<sup>39</sup>, この [神] が私に君を与えたのだ。さあて, 私は君によって (君を犠牲として) この [神] を祭ろう」と。(9) 彼は「いやだ」と言って, 弓を取って, 荒野へ逃れた (ŚānŚrSū 身を寄せた)。彼は一年間荒野において遍歴した。

## VII 15 (～ ŚānŚrSū XV 18 途中-20)

(1) すると, Ikṣvāku の子 (Hariścandra) を Varuṇa が捕まえた。彼の (彼には) 腹が生じた (膨れた)。<sup>40</sup> Rohita の方ではそれを耳にした。彼は荒野から村落へ帰ってきた。彼のところへ Indra が, 人の姿をして, 巡ってやってきて言った, [ここまで ŚānŚrSū XV 18]

「様々な栄華が努め励んだ者には<sup>41</sup> 存する,

<sup>36</sup> 語りの Perf. が求められるので, ŚānŚrSū の *prāpa* が正しく, AB *prāpat* は直後の *t* (*tam*) と (伝承過程にあったかも知れない *daṇḍa* |) と関連し, 直後にあるべき Aor. *prāpat* に影響された伝承上の誤りと思われる。辻 n.8 は *prāpa*, *prāpat*, *āmantrayām āsa* について KEITH AB 訳 301 n.3-5 の参照を指示。

<sup>37</sup> Aor. が求められるので, ŚānŚrSū の -a-Aor. 形 *prāpat* が正しい。AB は Perf. のあるべき場所にこれと同じ形を置いて伝承したため, 二次的に Ip. *prāpnot* に置き換えたものと推定される。

<sup>38</sup> AB *āmantrayām āsa* は ŚānŚrSū + *cakre* よりも新しい形である (XVII 7 ～ ŚānŚrSū XV 25 も同様), cf. WHITNEY § 1073d, BÖHTLINGK-GARBE 394。しかし, VII 16,3 *ikṣām cakre* :: ŚānŚrSū + *āsa*. (*kar/kṛ* による形には, Diathese を区別できるといふ *as* には無い利点がある。) →本論文末 3.。

<sup>39</sup> *tata* は普通「おとうちゃん」(cf. VII 15,8 = ŚānŚrSū), 「坊や」は *tāta* である。→ n.54)。

<sup>40</sup> 水腫病によって懲罰した。

<sup>41</sup> *śrānta*- G12, *śrama*- G13 と *śram* 「(疲れ果てるまで) 努め励む」からの語形が用いられている。*śramaṇa*- 「努め励む者, 沙門」(ŚānŚrSū 版の G16 の同語については n.49 参照) の語が思い浮かべられるが, *śramaṇa*- は, 専ら, 伝統的な祭官・学者階級としての *brāhmaṇā*- の生活を越えた出家的苦行者を意味する語として用いられる。BĀU IV 3,22 (Mādhyandina 版にアクセント付きの *śramaṇā*-), TĀ が

と、Rohita よ、我々は聞いている。

人の間に座っている者は<sup>42</sup> 悪い連中である。

Indra とは、遍歴する者の仲間である。(G12)

遍歴するのだ (ŚānŚrSū はさらに: Rohita よ)」と。(2) 「『遍歴するのだ』と私に向かって婆羅門が言った」と (考えて)、彼は第二の一年間を荒野において遍歴した。彼は、荒野から村落へ帰ってきた。彼に Indra が、人の姿をして、巡ってやってきて言った:

「遍歴する者の両脛は<sup>43</sup> 花で飾られる。

胴体<sup>44</sup> は健やかで、実をつける。

彼の罪惡たちは、全て、横たわっている、

古い出典例と思われる。Śunaḥṣepa の物語で問題になっているのは、伝統的枠組内での「努め励み」であるが、BĀU IV 5 に Yājñavalkya の出家 (*pra-vraj*) が語られ、二道説に *tāpas-* が現れる (BĀU VI 6.2, ChU V10.1) ように、当時、苦行、苦行者 (それ自体は RV にも跡づけられる) の重要性が増していたであろう。Nārada は、これに対して、伝統的守旧的立場を代表する。他方、後に見るように、苦行者は Indra に代表される嘗ての移動生活を範とする点で復古的色彩をもつ。Buddha, 仏教徒の活動もこれに類する。

<sup>42</sup> AB *nṛṣadvara-* 「男 (たち) の中に座る」、ŚānŚrSū *niṣadvara-* 「座りこむ」、cf. ŚānŚrSū XV 20: G16a *niṣad-* 「座りこむこと」。語根名詞に付せられる Suffix *-van-* (その形容詞派生形は *-vara-* による) については Gotō Fs.Thieme (1996) 94f. n.15 参照、たとえば *nṛṣād-* (RV IV 40.5, Parall. KathU II (5) 2 etc.), *nṛṣadvan-* (RV X 46.1)。Indra は古い時代の生活様式の象徴として、Varuṇa に代表される Āditya 神たち (「Āditi の息子たち」)。インドイラン共通時代に遡る、定住の比重が増した生活を反映) と対比される。RV IV 42 (Varuṇa と Indra)、特に、WITZEL-GOTÔ-SCARLATA 中の Gotô 訳と注を参照のこと。ただし、この物語の舞台はもはや草原、山岳地帯よりも木々の多い原野にあるように思われる (木のイメージ、→ n.45)。

<sup>43</sup> *puṣpinyau: vṛkī-* 活用。本来の *devī-* 活用からの移行形は、MACDONELL Ved. Gramm. 276: Du. b の項によれば、AV (3 例) 以降に見られる。AiG III 175 によれば、AV, YS<sup>m</sup> では殆ど *\*i*、散文文献では殆ど *\*au*。

<sup>44</sup> *ātman-*: 「胴、胴体」の意味については、例えば、後藤『今西順吉教授還暦記念論集』(1996) 847(102)f. n. 31, Gotô Gs.Renou (1996) 80 n.32 参照。

努め励みによって、道の先に、打ち倒されて。(G13)<sup>45</sup>

遍歴するのだ (ŚānŚrSū はさらに: Rohita よ)」と。(3)『『遍歴するのだ』と私に向かって婆羅門が言った』と(考えて)、彼は第三の一年間を荒野で遍歴した。彼は、荒野から村落へ帰ってきた。彼に Indra が、人の姿をして、巡ってやってきて言った:

「座っている者の幸運は座っている。

立っている者の〔幸運は〕まっすぐに立っている。

身を横たえる者の〔幸運は〕横たわっている。

遍歴する者の幸運は遍歴する(活動する)ことになる。<sup>46</sup> (G14)

遍歴するのだ (ŚānŚrSū はさらに: Rohita よ)」と。(4)『『遍歴するのだ』と私に向かって婆羅門が言った』と(考えて)、彼は第四の一年間を荒野で遍歴した。彼は、荒野から村落へ帰ってきた。彼に Indra が、人の姿をして、巡ってやってきて言った:

「横たわっていると、ひとは kali になる。

しかし、体を起こすと<sup>47</sup> dvāpara [になる]。

立ち上がると (ŚānŚrSū 立ち上がったならば) tretā となる。

遍歴すれば kṛta として完成する。<sup>48</sup> (G15)

<sup>45</sup> AB *phalagrahi*- に対して, ŚānŚrSū は Pāṇ III 2,26 に文字通り挙げられる *phalegrahi*- をもつ。AB *śere* に対して ŚānŚrSū はより新しい活用形 *śerate* をもつ。*prāpathe* (RV+) は *panthā*-「道」の *pra*「先方」の部分を用いる Prāpositionalrek-tionskompositum (前置詞限定複合語) であろう, cf. *prā-pad-a*-「つま先」, AiG II-1 13, 257. ŚānŚrSū はこの歌に当たるものを二つ後の歌 (G15) の後に置いている。G13 と G16 には木々のイメージ (仏典参照) が見られる。

<sup>46</sup> *carāti* Konjunktiv (subjunctive) は当時既に古語であったと思われる、韻律上採用されたものと考えられる。

<sup>47</sup> *saṃjihāna*- については、後藤『印度学仏教学研究』42-2 (1994) 1036 (47) n.9, Gorō Fs.Thieme (1996) 99 n.35 参照。

遍歴するのだ（ŚānŚrSū はさらに: Rohita よ）」と。(5)「『遍歴するのだ』と私に向かって婆羅門が言った」と（考えて）、彼は第五の一年間を荒野で遍歴した。彼は、荒野から村落へ帰ってきた。彼に Indra が人の姿をして巡ってやってきて言った:

「遍歴すればひとは蜜を見つけるのだ。

遍歴すれば甘い（ŚānŚrSū 熟した）優曇華の実を。

太陽の壮麗さ<sup>49</sup>を見よ、

遍歴し〔続けて〕倦むことのない〔太陽の〕。(G16)

遍歴するのだ」と。(6)「『遍歴するのだ』と私に向かって婆羅門が言った」と（考えて）、彼は第六の一年間を荒野で遍歴した。

[ŚānŚrSū: 彼は、荒野から村落へ帰ってきた。彼に Indra が、人の姿をして、巡ってやってきて言った:

「遍歴すればひとは蜜を見つけるのだ、

椰子の実を集め取りながら<sup>50</sup>。

立ち上がると、ひとは栄華を見つける。

座りこむことは何の助けにもならない。(G16a)

遍歴するのだ Rohita よ」と。「『遍歴するのだ』と私に向かって婆羅門が言った」と（考えて）、彼は第七の一年間を荒野で遍歴した。]

<sup>48</sup> 賭博 (*akṣá-*) の用語を用いて、動かぬ事を低く、遍歴することを最高のものとして称える。

<sup>49</sup> ŚānŚrSū 「太陽の努め励み (*śramaṇa-* を)」はおそらく二次的であろう, n.41 参照。

<sup>50</sup> *apacinvant-*: *apa-cay/ci* は ŚrSū., Ep. で「集め取る, (花などを) 摘む」意味で用いられ, Ep., Kl. では *ava-cay/ci* がその意味で用いられる。

彼は飢えに悩まされた（「取り囲まれた」）*R̥ṣi*（仙人）*Sūyavasa* の子 *Ajigarta* に、荒野で出会った（*uṇeyāya*）。<sup>51</sup>

(7) [~ *ŚānŚrSū* XV 20]

彼には三人の息子たちがあった、*Śunaḥpuccha*, *Śunaḥśepa*, *Śunolāṅgūla*<sup>52</sup> という。彼に言った「*R̥ṣi* よ。私は君に [牛] 百 [頭] を与える。私はこれら（息子たち）の中の一人によって、自分を買戻そう」と。<sup>53</sup> 彼は年長の息子を引き寄せて言った「この者は、だが、[渡さ] ない」と。「この者も [渡さ] ない」と年少のを母が。両者は中間の *Śunaḥśepa* について [取引を] 成立させた。彼のものと [牛] 百 [頭] を与え、彼（自身は）その [息

<sup>51</sup> *Sūyavasa* は「良き牧場を持つ者」、*Ajigarta* は「何も飲み込むものを持たぬ者」を原義とする。*ŚānŚrSū* は「飢えに悩まされ、息子を（一人）荒野に分け与えようと（森に捨ててしまおうと）している仙人に ...」。<sup>+</sup> *bhakṣyamānam* については Text の n.10 参照；さらに、*Goṛō I. Prās. 2. Aufl. Verbesserungen p.4 zu 222 n.469*。「飢え」には、*āsana-* AV MS TS ŚB KB JB AĀ, *āsanayā-* AB JB TB TĀ, *āsanāyā-* ŚB AB KB JB など多様な語形が存在する。「息子を食べようとした」（\**bhakṣyamāna-*, \**bhakṣiṣyamāna-*, \**bhokṣyamāna-*）という伝承ないし解釈があったことが *ManSmṛ* X 105 から知られる（婆羅門は、飢えを凌ぐためには、何をしても罪にならない例の一つとして）：*ajigartaḥ sutam hantum upāsarpad bubhuṣitaḥ* 「*Ajigarta* は殺そうとして息子に忍び寄った、飢えに苦しんで」。Puttamamṣa (SN II xii 63), Divy. 32, Avadānaśataka 35, 49 など仏典の輪廻を越える（*nittharaṇa-*）ための *āhāra-*「摂食、摂食」のモチーフも関係するかも知れない。

<sup>52</sup> *Śunaḥpuccha* 「犬の尾」, *Śunaḥśepa* 「犬のしっぽ」, *Śunolāṅgūla* 「犬の長しっぽ」。末子の名に見られる *lāṅgūla-* は *Śunolāṅgūla-* 以外には、「尾」の意味で AVP, ŚrSū. 以降用例がある、さらに、同じくパーリ語等に *laṅgula-*, *naṅgula-* など。RAU は *Śunolāṅgūla* を “Hunderute” と訳すが、尾の長い猿の一種、ハイイロヤセザル（*Semnopithecus entellus*）が Hanuman langur と呼ばれることから首肯される（授業時に山本侍弘氏が指摘してくれた）。*langūr*, *lāṅgūla-* は「犁」を意味する文化語 *lāṅgala-* と関連する（または、由来する）と考えるのが自然であろう。

<sup>53</sup> *ŚānŚrSū* 「*R̥ṣi* よ。さあ、私はこれらの中の一人によって自分を買戻したい。私は君に牛百頭をあげよう」。Śunaḥśepa は荒野を遍歴している間にかなりの牛の群れを手に入れていたことになる。略奪（cf. *Sārasvatasaṭtra*, cf. KRICK Feuergründung 497f., FALK BEI 6, 1988, 234, 250 n.24）、放牧、移動など、Indra を巡るモチーフが想定され、ChU の *Satyakāma* の物語（IV 4-9）などが想起される。後藤『インドの夢』p. 50-53 参照。



子を取って、彼は荒野から村落へと帰ってきた。

(8) 彼は父のところへ来て言った「お父さん<sup>54</sup>。さあ、私はこの者によって自分を買い戻したい」と。彼（父）は王 Varuṇa にすがった、「この者によって君を祭ろう」と。<sup>55</sup>「よろしい」と（Varuṇa は言った）。「婆羅門は王族より（値が）高い（ŚāñŚrSū: 優れている）のだ」と Varuṇa は言った。

彼のために、この Rājasūya（王即位祭）という祭式挙行を宣言した。<sup>56</sup>そこでこの人間（Śunaḥśepa）を灌頂の儀<sup>57</sup>において犠牲獣として捕捉した<sup>58</sup>。

## VII 16（～ ŚāñŚrSū XV 21-22 途中）

(1) 彼の（または：その〔祭式の〕）Hotar は、すなわち、Viśvāmitra であ

<sup>54</sup> *tata* → n.39。

<sup>55</sup> ŚāñŚrSū: 彼は「よろしい」と言って、王 Varuṇa に話しかけた。

<sup>56</sup> そもそも、Nārada の Hariścandra 王への助言「王 Varuṇa にすがれ、私に息子が生まれよ。その〔息子〕によって君を祭ろう、と言って」（VII 14,1）によって話が導かれてきたのであるから、「彼のために」は Varuṇa に捧げる意味であり、宣言した主語は Hariścandra 王ということになる。王の即位灌頂儀礼が、もともと王権の神格化である Varuṇa に捧げられるのは自然であるが、王として灌頂される祭主（Yajamāna）は Hariścandra 王自身で、息子を犠牲に捧げる意味となろう。Cf. WEBER Ind.St. IX 315 “ihm (dem Varuṇa) sagte er (der König darauf) jenes Rājasūya-Opfer an: dabei (dann) nahm er diesen Mann als Opferthier”. *pra-vac* については、Soma 祭に先立って *Somapravāka*-なる職によって「お触れを出す」*somapravacana* (cf. CALAND-HENRY § 4ff., WEBER Ind.St. IX 308, HILLEBRANDT Rit.lit. 125, PARPOLA LātyŚrSū I: 2 27 など) を参照。

<sup>57</sup> HEESTERMAN 63ff. 参照。

<sup>58</sup> *ā-lebhe: ā-labh* は、本来動物犠牲祭において犠牲獣（*paśu-*）を祭柱に縛り付ける前に「捕まえる」行作を示し、以後犠牲獣の部位の献供に至るまでの全体を意味する用法に用いられる：CALAND ad ĀpŚrSū VII 13,8, n.4 “Wenn er heiβt: ‘Er fasst das Opfertier an’, so wird nur eine der Haupthandlungen erwähnt, um das Ganze anzudeuten (vgl. ‘Er streut eine Opferkuchen aus’: *puroḍāsaṃ nirvapati*, s. v. a.: ‘Er verrichtet eine *Iṣṭi*’).” Gorō 『印度学仏教学研究』24-2, 1976, 1015-1007, Gorō Akk. (2002) 40. 従って、Śunaḥśepa がここで犠牲にされて話は終わっていたとし、以下を割愛する RAU AsS 20 (1966) 96 n.77 の解釈は意味をなさない。

った<sup>59</sup>。Adhvaryu は Jamadagni [であった]。Brahmaṇ は Vasiṣṭha [であった]。Udgātar は Ayāśya [であった]。<sup>60</sup> 引かれてくると、<sup>61</sup> 彼 (Śunaḥśepa) のために、(祭柱に) 縛り付ける係を [彼らは] 見出さなかった。[すると] Sūyavasa の子 Ajigarta が言った「私に更なる百 [頭の牛] を [君たちは] 与えよ。私がこの者を縛り付けよう」と。彼に更なる百 [頭の牛] を [彼らは] 与えた。彼を彼は縛り付けた<sup>62</sup>。

(2) 引かれてきて、縛り付けられ、宥め [の讃歌を唱え] られ、<sup>63</sup> 火で周囲を清められた<sup>64</sup> 彼に対して、解体する係を<sup>65</sup> [彼らは] 見出さなかった。

<sup>59</sup> AB *ha ... āsit*. ŚānŚrSū の *ha ... āsa* は Perf. による語りの語形 (itihāsa 「だったとさ」スタイル) である。DELBRÜCK AiSynt. 501 は VII 16 以降 *ha* が殆ど現れないことを、理由不明として指摘している。具体的には (1) の *sa hovācājigartaḥ* 以後 VII 16 の終わりまで *ha* を欠き、VII 17 以降再び *ha* が現れる。*ha* + Perf. による語りの文体は、もともと、新しい話題を導く文を *ha* 「つまり、すなわち」で印づけたものと推測され、VII 16 では、文が次々と畳みかけられているものと説明できる。AB VII 16 冒頭の *ha ... āsit* は *ha* + Perf. による語りとは異なり、「つまり、すなわち」を意味する *ha* と「神学者たちの」Ipf. (おそらく擬古の文体に遡る、cf. Gorō Fs.Narten, 2000, 98) によって新たな枠組みを与える工夫と考えられる。

<sup>60</sup> Śrauta 祭式において、Hotar は RV の讃歌を担当、Adhvaryu は *yājuṣ-* を唱えながら祭式の具体的行作を実行、Brahmaṇ は祭式全体の監視と「治療」、Udgātar は *sāman-* (歌詠) の詠唱を担当する。祭官たちは、ここではいずれも RV に家集または讃歌を残す聖仙たちである。

<sup>61</sup> *paśūpākaraṇa, niyojana*, cf. SCHWAB 74-76.

<sup>62</sup> ŚānŚrSū *niyuyoja* が正しい形。AB *niniyoja* は *ni-yuj, niyojana-* が一語の術語として扱われ、崩れたものであろう。

<sup>63</sup> *āpri* 讃歌。動物犠牲祭の前献供 (prayāja) に用いられる: SCHWAB 90 n., HIL-LEBRANDT Rit.lit. 16. RV に、I 13 (Kāṇva), I 142 (Aucathya), I 188 (Agastya), III 4 (Viśvāmitra), IX 5 (Kāśyapa), X 110 (Bhṛgu/Jamadagni), および Vasiṣṭha 系統の VII 2 (Vasiṣṭha), II 3 (Śaunaka), V 5 (Atri), X 70 (Vadhryasva), 計 10 讃歌が収録されている。

<sup>64</sup> *paryagnikaraṇa, paryagnikriyā*: SCHWAB 96-99.

<sup>65</sup> AB *viśāstāram* が正しく、ŚānŚrSū *viśāstāram* は解体の指示を個々に与える意味の *vi-śās* (CALAND Kl.Schr. 239f., Ueber Baudh 53, ad ĀpŚrSū VII 22.5 参照。OERTEL ZII 8 296 = Kl.Schr. 603 は不正確) に影響されて崩れたものであろう。*sās/siṣ* 「指示する」は RV (*sās-si*) 以来 athem.Wz.Präs. に活用し、後の文献に至るまで

[すると] Sūyavasa の子 Ajigarta が言った「私に更なる百〔頭の牛〕を与えよ。私がこの者を解体しよう」と。彼に更なる百〔頭の牛〕を〔彼らは〕与えた。彼は剣を砥ぎながら<sup>66</sup> やって来た。

(3) すると, Śunaḥśepa は思い巡らした<sup>67</sup> 「人の子でない者をのように, 私を〔彼らは〕解体しようとしているのだ。そうだ, 私は神格にすがろう<sup>68</sup>」と。[〜 ŚānŚrSū XV 22] 彼は神格たちの中で最初の者として<sup>69</sup> Prajāpati にすがった<sup>70</sup>: 〈今, 誰の, 不死の者たちの中のどの神の〔好ましい名を我々は思念すべきか。誰が我々を偉大な Aditi へと, 返し与えるのか。父にも会いたい, 母にも〕〉というこの詩節 (rc) 【RV I 24.1】を用いて。<sup>71</sup>

語形用例ともに多い。śas 「切る」も本来 athem.Wz.Präs. に活用し RV (2.Pl. Iptv. *vi-śasta* など) 以来見られるが, ŚB (*vi-śāsanti*) 以降, Ep., Kl. に至るまで thematisiert された *vi-śasa*<sup>-ti</sup> が現れる。「切り分けの指示」と「切り分け」との対比は, 例えば, *viśāsti* ĀpŚrSū VII 14.13 :: *viśasati* MānŚrSū I 8.3.9. さらに, G21 (→ n.107) *viśiśāsiṣat*-ŚānŚrSū XV 25.1, *viśiśāsiṣu*- AB を見よ。paśuviśasana SCHWAB 125f: § 89 参照。

<sup>66</sup> ŚānŚrSū *niśyāna*- は古い文献にのみ現れる活用形 \**ni-śiśāna*- (*śiśāmi*, *śiśite* etc. RV—mantra 文献) と \**ni-śyamāna*- (*-sya*<sup>-ti</sup> AV YSP Br. Yā, *-śya*<sup>-te</sup> JB) との混交した逸脱形で, おそらく AB-ŚānŚrSū の共通テキストにあった形であろう。別の混交形 *saṃ-śiśyamāna*- Yā X 30 参照。AB の *niḥśāna*- は *niśyāna*- から崩れた \**niśśāna*- を *nir*- によって再解釈したものと判断される。*-eta* に代わり *-ita*, *-ayamāna*- に代わり *-ayāna*- が現れる現象 (HOFFMANN Aufs. 371, GoTō Morphology 96) もこれと関連するか。

<sup>67</sup> *ikṣām cakre* → n.38.

<sup>68</sup> AB Ind.Präs. *upadhāvāmi*, ŚānŚrSū Konj.Präs. *upadhāvāni*.

<sup>69</sup> *prathamam*: あるいは「最初に」(adv.).

<sup>70</sup> *upadhāvāmi*, *-dhāvāni* と *upasasāra* の Suppletion (補完現象) に注意, → n.29.

<sup>71</sup> 以下, Anukramaṇī が Śunaḥśepa (= Devarāta) の作としてあげる RV の詩節を順次列挙する。その際, 既に編集された RV の存在が予想され, Anukramaṇī はこの Śunaḥśepa の物語を知っていることになる。I 24.1: *kāśya nūnām katamāsyā-mṛtānām* | *mānāmahe cāru devāsya nāma* | *kó no mahyā āditaye pūnar dāt* | *pītaraṃ ca dṛśeyam mātaraṃ ca* 「今, 誰の, 不死の者たちの中のどの神の好ましい名を我々は思念すべきか。誰が我々を偉大な Aditi へと返し与えるのか。父にも会いたい, 母にも」。「偉大な Aditi へと」については, 創造讃歌 RV X 72.9 に現れる Mār-tāṇḍa からの人の生と死の成立, 神々の世界への帰還のモチーフを参照 (後藤

(4) 彼に Prajāpati は言った「Agni（火）が神々の中で最も（人に）近いのだ。彼にこそすがれ」と。彼は Agni にすがった：〈我々は、不死の者たちの中の最初の、Agni の〔、好ましい名を我々は思念したい。誰が我々を偉大な Aditi へと、返し与えるのか。父にも母にも私は会いたい〉〕というこの詩節【I 24.2】によって。

(5) 彼に Agni は言った「Savitar（鼓舞する、権限を与える者）が（諸々の）指図を支配している。彼にこそすがれ」と。彼は Savitar にすがった：〈〔欲しいものたちを支配している〕君に、鼓舞する（権限を与える）神よ、〔常ある者よ、我々は分配（恩恵）を求める〕...〉というこの3詩節一組<sup>72</sup>【I 24.3-5】によって。

(6) 彼に Savitar は言った「君は王 Varuṇa の為に（祭柱に）繋がれているのだ。彼にこそすがれ」と。彼は続く 31 の詩節【I 24.6-25.21】によって王

『国際仏教学大学院大学研究紀要』20, 2016, 21-47, 特に 41-43)。「父にも会いたい、母にも」に注目。*kasya* で始まるため、Prajāpati への讃歌とされる、cf. AB VI 21,2 *ko vai prajāpatiḥ* 「Prajāpati は *ka* なのだ」、cf. AiG III 567, GONDA Sel.St. VI-2 449-469. Konjunktiv (subjunctive) の疑問文、肯定文における機能（「...べきか」「sol-len wir」、次の I 24.2 には同じ *mānāmahe* が肯定文で「思念しよう」「wir wollen gedenken」の意味で用いられている）については、堂山英次郎『リグヴェーダにおける1人称接続法の研究』参照。——この前後に、RV 派の「正書法」*a/ā+ṛ>aṛ* に反する形が AB (各版), ŚānŚrSū を通じて見られる。AB の該当箇所を挙げると、*-a+ṛ: evarcy* VII 16,13 (～ŚānŚrSū *smarcy*), VII 16,13 *smarcyṛcy* VII 16,13, (他に *pañcartavo, vas, nartuyājānām, (a)nihānarcaḥ, narched*); *-ā+ṛ: etayarcā* VII 16,3,4 (II 16,1, II 20,7, III 34,3, VII 33,1 にも, cf. *ekayarcā* I 12,3, II 18,11, III 34,3, VI 14,4, *yathartv* V 9,2, *vārcā* VII 5,1)。AB における *-a+ṛ>-aṛ-* の例については、WEBER Ind.St. IX 308f., さらにこの Sandhi の現象について、AUFRECHT AB-Ed. 427, KEITH RV Brahmanas 71 参照, cf. n.140.

<sup>72</sup> *tṛca-: tricā-* (YSP, ŚB+) または *tṛcā-* (AV, YSP+)。Zahlwortkomplexivkompositum (数詞包括複合語, SOMMER-Kompositum) *try-ṛc-ā* 「3つの *ṛc-* からなるもの」、即ち *\*triṛca-* または *\*triṛca-/trirca-* から dissimilation によって *tricā-* または *tṛcā-* に変化したものであろう。*tryṛca-* という語形は KpSP XXXV 4:<sup>2</sup>210,16 *tryṛcena* ～KSP XXII 10:67,4 *tryṛcena* (KpS 脚注「KS. *tryṛc*° to be corrected»), KSP VII 9:70,16 *tricaḥ* の異読（「So D; Ch *triyyṛcaḥ*」）にも現れるが、後の Smṛti 文献以降確実に在証される。AiG I, Nachträge 148 参照。

Varuṇa にすぎた。(7) 彼に Varuṇa は言った「Agni が神々の中で顔（「口」，前面，一番前の部分）であり，最も良い心根を持つ者だ。彼を，さあ，讃えよ。そうしたら君を我々は (ŚānŚrSū 私は) 開放するだろう」と。彼は続く 22 詩節【I 26,1-27,12】を用いて Agni を讃えた。(8) 彼に Agni が言った「あらゆる神々 (Viśve Devah) を，さあ，讃えよ。そうしたら君を我々は (ŚānŚrSū 私は) 開放するだろう」と。彼は『あらゆる神々』を讃えた：〈偉大な者たちに敬意 [あれ]。弱小の者たちに敬意 [あれ]。[若い者たちに。年取った者たちに。我々は神々を祭りたい，我々ができるべきならば。格上の者の公言を，私が被ることのないように，神々よ]〉というこの詩節【I 27, 13】を用いて。

(9) 彼に「あらゆる神々」は言った「Indra が神々の中で最も体力あり，強力であり，凌ぎ勝り，実行力があり<sup>73</sup>，目的を最もよく果たさせる者である。彼を<sup>74</sup> さあ，讃えよ。そうしたら君を我々は開放するだろう」と。彼は Indra を讃えた：〈もし，実行（実現）する者よ，ソーマを飲む者よ [我々自身は権利を主張されていない（求められていない）者のようであるとしても，それでも，我々に，Indra よ，幾千の，美しい牛たちについて，馬たちについて，権利を主張させよ，強力な能力ある者よ]〉というこの讃歌【I 29】と続く讃歌（I 30 [22 詩節からなる]）の 15 詩節【I 30,1-15】とによって。

(10) 彼に，Indra は讃えられている間に，満足して，思考によって<sup>75</sup> 黄金の戦車を与えた。彼 (Indra) に [Śunaḥśepa は] 〈次々に，Indra は [鼻息を繰り返しあげ，繰り返して嘶き，息吹を繰り返す (馬たち) によって，財産たちを勝ち得た。彼，驚異的能力ある者は，我々に黄金の戦車を<sup>76</sup>，彼，獲得者は我々が

<sup>73</sup> *sattama*:- ṛc 中の Vokativ *satya* を意識して用いていると考えられる。「嘘をつかない，実現する」という方向の意味が意図されている。

<sup>74</sup> ŚānŚrSū は「Indra が...」からここまで，単に「Indra を」とする。

<sup>75</sup> ŚānŚrSū は「満足して」を欠く。これが元で，「思考の力によって車を与える」という表現を（我々同様）具体的に解しかねて，AB は「思考に満足して，心の中で満足して」（cf. DELBRÜCK AiSynt. 126 “erfreut mit seinem Sinne”）という解釈に変えた可能性がある。

<sup>76</sup> *hiranyaratha*- は「黄金製の戦車，軽乗用車」であろう。GELDNER は einen Wagen voll Gold 「車いっぱい黄金」と訳すが，複合語としても（cf. *hasti-hiranya*- 「象

獲得するようにと、彼は我々に与えた]》というこの〔詩節〕【I 30,16】によって応じた（正式に受諾した）。

(11) 彼に Indra は言った「両 *Aśvin* を、さあ、讃えよ。そうしたら我々は (*ŚānŚrSū* 私は) 君を開放するだろう」と。彼は両 *Aśvin* をこれに続く 3 詩節一組【I 30,17-19】によって讃えた。(12) 彼に両 *Aśvin* は言った「*Uṣas* (曙の女神) を、さあ、讃えよ。そうしたら我々は (AB 複数, *ŚānŚrSū* 両数) 君を開放するだろう」と。彼は *Uṣas* をこれに続く 3 詩節一組【I 30,20-22】によって讃えた。(13) 1 詩節 1 詩節が言われ終わると、その都度、彼の縛り縄が解けた。<sup>77</sup> *Ikṣvāku* の子 (*Hariścandra*) の腹は小さくなる<sup>78</sup>。最後の詩節が言われ終わると<sup>79</sup>、縛り縄は解け外れた。*Ikṣvāku* の子は病なく [なって] いた (*ŚānŚrSū* なくなった)。

## VII 17 (～*ŚānŚrSū* XV 22 途中-26 途中)

(1) 彼に祭官たちが言った「ほかならぬ君が我々のために、この日の締めくくり<sup>80</sup>を思い当たれ (考案せよ)」と。<sup>81</sup> [～ *ŚānŚrSū* XV 23] すると、

---

一頭に載る量の黄金」:: *hiraṇya-garbhā*-「黄金(製)の胎児」, *hiraṇya-pakṣa*-「黄金の翼」, *ratha*- が荷車ではなく、戦車、軽乗用車であることからふさわしくなろう。

<sup>77</sup> DELBRÜCK AiSynt. 502f. は *ha sma* (±*purā*) + Präs.Ind. の構文を扱い (「[かつては] ... していたものだった」), AB の当該箇所 *ha sma ... vi pāso mumuce* を例外的なものとしている。ここでは、全体が *ha* + Perf. の語りのテンスで語られ、*sma* (原義は「いつも、いつでも」) は「一詩節が唱えられるごとに」を明確化して「その度毎に」の意味で用いられていると考えることができる。AB の *vi ... mumuce* 「解け外れた」が完全に解けてしまったと理解されかねないための処置とも考えられる。*ŚānŚrSū* は *nitarām mumuce* 「(順次一層) 下へ下へと解けた」。

<sup>78</sup> AB は *bhavati* と Ind.Präs. になっている。前の文の *ha* + Perf. の構文に *sma* が加わったものを、過去の繰り返しを謂う *sma* + Ind.Präs. の強い形 *ha sma* + Ind.Präs. の構文 (前注参照) への連想から、*babhūva* (*ŚānŚrSū*) から *bhavati* へと置き換えた結果とも考えられる。

<sup>79</sup> *ŚānŚrSū uttamāyām ha smarcy* の *sma* はない方がよい。前の *ha sma* に影響されたものとも考えられる。*ŚānŚrSū uttamāyām* は名詞活用、AB *uttamasyām* は代名詞活用に従う、cf. Goṛō Morphology 77。

Śunahśepa は、この（例の）、早絞り（*añjāsava-*）を見た（感得した）。<sup>82</sup> その「早搾り」を<sup>83</sup> これら4つの「讃歌 *ṛc-*」を用いて圧搾にかけた、〈もし君が、杵よ、各家で用いられるとしても、[ここにおいて最も輝かしく音をたてよ、勝利しつつある者たちの太鼓のように。...]〉と【I 28,5-8】。<sup>84</sup> 次に、当のものを<sup>85</sup> 木の手桶へと導き入れた、〈残りを「両の」桶「の中」へと取り出せ。[ソーマを篩へと流し入れよ。牛の皮の上へと（残り[?]）を）据えよ〉【I 28,9: 同讃歌の最終詩節】というこの讃歌を伴って。次に、この者（*Hariścandra* 王）が後ろからつかまっている間に<sup>86</sup>、*svāhā* の発声をともなった先行する（最初の）4「詩節」【I 28,1-4】を用いて（Śunahśepa は *Soma* を祭火に）献供した<sup>87</sup>。

<sup>80</sup> *saṁsthā-*: または、「（ソーマ祭の）型式、一セット」, cf. 例えば HILLEBRANDT *Rit.lit.* 137 (mit Lit.)。

<sup>81</sup> AB *adhigacchety (atha haitam ...)* に対し、ŚānŚrSū は *iti* を欠き、Opt. *-gaccheḥ* ||22|| *athainam ...* となっているが、何らかの二次的逸脱であろう。また、*enam* もそれが指すものがなく、文中でも浮いてしまうので、少し後の *atha hainam* で始まる文（ŚānŚrSū に2回、AB では3回）に影響されて崩れたものかと思われる。以下、ŚānŚrSū は AB と語順が異なることが多い（特に、AB VII 17,1 ~ ŚānŚrSū XV 22 末-23 の部分）。

<sup>82</sup> *añjāsava-* は以下に引かれる RV I 28 に想定される、穀物の供物の場合のような堅杵と臼を用いた簡略な *Soma* 搾りの方法を指す、cf. GELDNER *z.St.*。

<sup>83</sup> *tam* は文中に出ない *soma-* を指すとも考えられるが（「ソーマに対して圧搾を加える」）、*abhi-sav/su* の内容を限定する一種の *Inhaltsakkusativ* と解した。

<sup>84</sup> ŚānŚrSū では唱えるべき詩節を引いてから、行作を *Absolutiv* で述べ、*sūtra* 風の文になっている。

<sup>85</sup> *enam*: 内容上、搾り出された *Soma* を指す。

<sup>86</sup> Śunahśepa が *Adhvaryu* の役を演じて献供を行い、その献供の際、祭主に当たる *Hariścandra* が後ろから Śunahśepa の衣服の裾をつかんでつかまっているのである。*anv-ā-rabh/labh* については、cf. CALAND *ZDMG* 53 (1899) 215ff. 更に、EGGELING *ŚB* II 40 n.1, 306 n.4; OERTEL *Syntax* 233, 285; MINARD *Trois énigmes* I §553a, (II §50a, 146a, 716a); RENOU *Vocabulaire* 14; GONDA *Savayajña* 129, 153; BODEWITZ *JB* I 1-65 p.145 n.15; GOTÖ, *JIBS* 24-2 (1976) 1013。

<sup>87</sup> AB, ŚānŚrSū ともに *juhōti* から作った迂説完了 *juhāvām cakāra*。この形 (cf. *Pāṇ* III 1,39) は Br., KauṣU, ŚrSū. に見られる正規形である。RV には *Med. juhvé, juhṛé* が見られる。*hvā/hav<sup>i</sup>/hū* 「呼ぶ」（例えば *juhāva* RV, *ā, sam-* Br.）と区別す



次に、当の者（Hariścandra 王）を沐浴<sup>88</sup> へと（川へ）導いた、〈そのような君は、Agni よ、知っている者として、神 Varuṇa の怒りを我々のために〔詫びて許してもらってほしい...〕〉【IV 1,4-5<sup>89</sup>】というこの 2 詩節を用いて。

次に、これ（沐浴）これに引き続き<sup>90</sup> 当の者に、Āhavanīya 祭火（「供物の献じ入れられるべき」祭火）を礼拝させた、〈千〔頭の牛〕と交換に、縛り付けられた「犬のしっぽ」さえも...〉<sup>91</sup> と（唱えつつ）。

るために用いられたものと考えられる。

<sup>88</sup> *avabhṛta*：Soma 祭の終わりに川（または池）において行われる祓いの沐浴を中心とする儀礼。*ava* が「水辺へ下って」を含意することは稀ではない。例えば、DELBRÜCK AiSynt. 450 は *ava-ay/i* に「下って行く、陥る」の意味を挙げた後、“B[ÖHT-LINGK-]R[OTH] setzen noch die Bedeutung weggehen an, indessen handelt es sich meist um ein Herabgehen zum Flusse oder sonst zum Wasser”（PW は「去る」の意味を想定するが、ほとんどの場合、川、でなければ水へと降りて行くことを謂う）と注記する。

<sup>89</sup> IV 1,4 〈君は、我々のために、Agni よ、知っている者として、神 Varuṇa の怒りに赦しを乞うて欲しい。最もよく祭る者、最もよく運ぶ者として、〔常に〕白熱しながら、あらゆる敵意たちを解き放つてしまえ、我々から〉。同 5 〈そのような者として君は、我々のために、Agni よ、援助を伴って、我々の間近にあれ（*bhava* 現れよ）、この曙の曙光において、最も近くに。祭りによって宥めよ、我々のために、Varuṇa を、（贈り物を）贈りつつ。寛恕を追い求めよ。我々の呼びかけ易い者であれ〉。直接 Śunaḥśepa に関係しない Vāmadeva 家の讃歌。*mumugdhi* (4d) がキーワード。ŚānŚrSū は RV IV 1,5, IV 1,4 の順でそれぞれ Pratiika で引く。WELLER Śunaḥśepa 83 は、Hss. の欄外に書き足されたものが、誤って書き写されたとするが、連続する 2 詩節の場合、最初の Pratiika だけで足りる。ŚānŚrSū が想定する引用の順序が逆転していたことを指示するものと思われる。*avabhṛta* に関する儀礼は、水あるいは川と関係の深い Varuṇa に結びつけられる。

<sup>90</sup> *ata ūrdhvam*：あるいは、「ここから上がって」。

<sup>91</sup> V 2,7 〈千〔頭の牛〕と交換に、縛り付けられた「犬のしっぽ」さえも、祭柱から〔君は〕解放した。彼は（犠牲獣として）仕上げられていたのだから。そのように、我々から、Agni よ、捕り縄たちを解き放つてしまえ、気づいている Hotar よ、ここに、おまえは、だが、座を占めてから〉。*vī mumugdhi pāsān* (Pāda c) がキーワード。Atri 家の歌。*sahāsrād* の解釈は GELDNER に従う（WEBER Ind.St. X 68 を指示：Purusamedha [人を犠牲とする祭式] の為には、祭主は牛 1000 頭および馬 100 頭と交換に婆羅門または王族の者を買収する：ŚānŚrSū XVI 10,10。買収された者は犠牲の馬と同様に扱われて、実際に犠牲にされる：ib. XVI 12,16-20。Cf.



(2) [~ ŚānŚrSū XV 24] すると (次に), Śunaḥśepa は Viśvāmitra の膝の上に座った (ŚānŚrSū 走り寄った)。かの<sup>92</sup> Sūyavasa の子 Ajigarta は言った「Ṛṣi よ、私に息子を返せ」と。「いや」と Viśvāmitra は言った、「神々がこの者を私に授けた<sup>93</sup> のだ」と。彼は (そこで [彼は] *sa* → n.92) Viśvāmitra の子, Devarāta (「神々に授けられた者」) であった。この (現に存在する) Kāpileya と Bābhraṇa たちは彼に属する (由来する)<sup>94</sup>。

(3) かの (→ n.92) Sūyavasa の子 Ajigarta は言った「君は、さあ来い。<sup>95</sup> 呼びかけによって勝負をつけよう<sup>96</sup>」と。

すると (→ n.92) Sūyavasa の子 Ajigarta は言った,

---

WEBER ZDMG 18 269f.)。この「説話」では  $100 \times 3 = 300$  頭となっている。V 2,7b *āśamiṣṭa* (+ *hi*) は Ipf. *amuñcas* に対して大過去の価値の Aor. (この機能については, cf. HOFFMANN Inj. 157f., DELBRÜCK AiSynt. 578, Vergl.Synt. II 283f., THIEME Plsq. 7f.)。

<sup>92</sup> 代名詞 (のいずれかの格形) を文頭に立てることにより文の連続を示すシンタクス上の役割から、「かの」と訳した *sa* は事実上「すると、そこで」のような意味をもつ。

<sup>93</sup> *arāsata*: RV のみに生きていた *rā* の s-Aor. から, Śunaḥśepa が新たに得た名 Devarāta- を説明するために人工的に作られた現在語幹 Ipf. Cf. NARTEN Sigm.Aor. 221。

<sup>94</sup> 共に動物に深く関わる色, 「淡? 赤茶色, 猿色」および「(赤) 褐色, マングース色」, に基づく部族名。Girija-Babhravya-なる人名は AB VII 1,2 に現れる。この一文は ŚānŚrSū に欠ける。

<sup>95</sup> *tvam v ehi* 「君は, 他方/だが, 来い」; *u* の Sandhi (母音の前でも通常 *u* のまま, cf. Pāṇ I 1,14) については Pāṇ VIII 3,33 参照 (前語の語末の子音 [ただし半母音を除く] の後, 母音の前で *v* に成り得る: cf. AiG I 320, 辻『説話』p.15 n.26, FALK ZDMG 134 p.133 n.49)。ŚānŚrSū は *tam vai vihvayāvahā iti* 「彼を互いに呼びかけ合おう」。AB にあるような読みを解しかねて, 改変したように思われる。*vai* が散文中で会話中に用いられる例は確かに存在する, 例えば DELBRÜCK AiSynt. 485f. の挙げた個所, さらに, この説話中, 韻文中ではあるが G23, G24。

<sup>96</sup> *vi-hvaya*<sup>-te</sup>: cf. WEBER Ind.St. IX 316f., さらに CALAND Zauberei Nr.78 (p.57) に現れる例をも参照せよ。さらに, 西村「Ṛgveda X 128 Vihavya-Sūkta の展開」印度学仏教学研究 63-2 (2015) 252-258 参照。ŚānŚrSū では「そう (しよう)」という Viśvāmitra の答えが入る。

「生まれによって〔君は〕 *Āṅgiras* 一族の者、  
*Ajigarta* の子として聞こえた見者 (*kavi-*) である。  
*Ṛṣi* よ<sup>97</sup>、父祖以来の（血）筋から  
 外れるな。私のもとへ戻れ」（G17）

と。かの（→ n.92）*Śunaḥśepa* は言った、

「〔人々は〕見たのだ（Aor.）<sup>98</sup>、君が刃物を手にしているのを、  
*sūdra* たちの間に〔さえ〕〔人々が〕得た（経験した）<sup>99</sup> ことのないこと  
 だが。  
 牛たち 300 頭〔の方を〕を君は  
 選んだ（Ip.），私よりも、*Āṅgiras* よ<sup>100</sup>」（G18）

と。（4）すると（→ n.92）*Sūyavasa* の子 *Ajigarta* は言った、

「そのことが私を、いとしい子よ、悩ませている。  
 悪い行いが私によって為された。  
 それを私は君に謝る<sup>101</sup>。

<sup>97</sup> *Śunaḥśepa* の示した RV 讃歌を作る（見る）*ṛṣi-*としての能力を意識して呼びかけているのであろう。*ṛṣi-*「聖者、仙人」は、もともと「荒ぶれる者」を意味したと思われる。RV の讃歌を作る（「見る」）霊能者は *kavi-*「見者」、*vīpra-*「（靈感に）震える者」などとも呼ばれる。

<sup>98</sup> AB の不規則形 *adarśur* については HOFFMANN Aufs. 147 を見よ（: 1.Pl. Wz.-Aor. *adarśma* から二次的に作られた形）。*ŚānŚrSū adrākṣur* は s-Aor. による正規形。

<sup>99</sup> *alapsata: labh*「得る」の s-Aor. 3.Pl. *ŚānŚrSū* にある *alipsata* は Desiderativ 3.Sg. Ip. と解釈できる、「〔人は〕得たくなかった」。→ Text n.14。

<sup>100</sup> *Āṅgiras* の家系の（当代の）長を父祖名で呼ぶものか。あるいは、固有名詞ではなく、一種の称号のように扱われているものとも。

<sup>101</sup> 逸脱形 AB *nihnave* (*ŚānŚrSū* は正規形 *nihnuve*) については、Goṭō I.Prās. 351 を見よ（例えば、サーマン名として JB に現れる名詞 *ni-hnava-*「謝罪」に引かれた形とも）。

牛たち [3]00 頭<sup>102</sup> は戻れ（返す）」(G19)

と。すると（→ n.92）Śunaḥśepa は言った、

「ひとがもし、一度、悪いことをすることがあれば、  
そのことをそれから、することになろう。

śūdra に属する理屈<sup>103</sup> から [君は]（一歩も）出なかったのだ（Aor.）<sup>104</sup>  
修復不可能なこと<sup>105</sup> が君によって為された」(G20)

と。(5)「修復不可能 [だ]」と、Viśvāmitra が乗り出した。<sup>106</sup> すると（→ n.92）Viśvāmitra は言った、[～ ŚānŚrSū XV 25]

「Sūyavasa の子は、まさに恐ろしく、  
包丁で切り分けようとして<sup>107</sup>

<sup>102</sup> 中性複数形 *śatā* はヴェーダ語形。

<sup>103</sup> *śaudrān nyāyād*。この反対概念が *ārya*- の理屈・道理と思われる、cf. *ārya-dharma*- 「アーリヤの人々にとっての道義、仁義」（後藤『国際哲学研究』3 43 参照）。Cf. 仏教における (*cattāri*) *ariyasaccāni* 「アーリヤの人々にとっての真実、四聖諦」。

<sup>104</sup> *nāpagāḥ* G17 を意識して動詞を選択。ŚānŚrSū *māpagāḥ* は G17 の同語形に引かれた誤りであろう。

<sup>105</sup> *asaṃdheya*-。 *saṃ-dhā* は「（部分があるべき場所に配置して）構成，結合する，作り出す」意味であり，*asaṃdheya*- は「治す，治療することができない」意味にも用いられる。ここでは，また，「一度断った関係は（正しく）結び直せない」とも解釈できる。

<sup>106</sup> ŚānŚrSū: 「修復不可能 [だ] と言ったぞ」と Viśvāmitra が乗り出した。（これに続く一文を欠く。） *asaṃdheyam* をきっかけに Viśvāmitra が呼びかける番になる。*asaṃdheyam* には法律用語としての意味があるかもしれない。

<sup>107</sup> AB *viśiśāsiṣur* は *sās* 「指図する」に影響された形（→ n.65）；短音節の連続する *viśiśāsiṣu-* が韻律上好ましくないことも背景にあった可能性がある。ŚānŚrSū *viśiśāsiṣat* は Desideratv の Part. と考えられるが，それならば *-an* が求められる。次行の *asthāt* に続けず，Pāda の終わりで文を終えて，RV の Inj. を模倣した二次的改変とも考えられる。

「構えて」居た（Aor.）。この者の息子になってはいけない。  
ほかならぬ私の息子たることへと入れ（頼れ）」（G21）

と。（6）すると（→n.92）Śunaḥśepa は言った、

「それならば（→n.92）[君は] 我々に解らせるように<sup>108</sup>、  
王族出の者よ<sup>109</sup>、その次第を語れ、  
いったいどのようにして、[私が] Aṅgiras 族のものでありながら、  
君の息子たることになれるかを」（G22）

と。すると（→n.92）Viśvāmitra は言った、

「最上位の者（最年長者）と、君は、私の息子たちの中で、なるべし<sup>110</sup>。  
君の子孫は最も栄えあるものとなるべし（→n.110）。<sup>111</sup>  
私の、神々に由来する遺産に与かるべし（→n.110）。  
これをもって、君に語りかける（謀る）のだ」<sup>112</sup>（G23）

と。（7）すると（→n.92）Śunaḥśepa は言った、

「[彼らが] 同意しているならば、[ひとは] 言うがよい、<sup>113</sup>

<sup>108</sup> *jñāpayās* Konj. (subj.) 話し手の意志を表す機能をもつと思われる。ヴェーダ語の語法であろう。ŚānŚrSū は命令形 *jñāpaya* に改変。

<sup>109</sup> °*putra*- については LÜDERS *Philologica Indica* 86, 231, 347 n.3, THIEME MSS 44 (Fg. HOFFMANN I) 251. 後の個所からも知られるように、Viśvāmitra は王族階級出身（G24: Bharata の一族）の Ṛṣi（G23: Gāthin の最上家系）であったことになる。

<sup>110</sup> 「条件提示の」 Opt.。

<sup>111</sup> おそらく、Viśvāmitra は Gāthin 一族の中の、最上位の家系の長であり、それを受け継ぐことになる、というのであろう。

<sup>112</sup> 正式の条件（家系の筆頭者を提供）を提示。a-c に Opt. を用いている。

<sup>113</sup> AB *saṃjñānāneṣu* は ŚānŚrSū にある *saṃjñānāneṣu* から崩れたものとしか解せない（cf. *saṃjñā*-「合意，同意」）。他方，AB *brūyāt* に対し，ŚānŚrSū の *brūyās*

私が友情〔を結べる〕ように,〔また〕光栄のため,  
 どうしたら私が<sup>8</sup>, Bharata 族の雄牛(種牛)よ<sup>114</sup>,  
 君の息子たることになれるかを」(G24)

と。すると, Viśvāmitra は息子たちに語りかけた<sup>115</sup>,

[~ ŚānŚrSū XV 26]

「Madhucchandās は — [君たちは] 聞け<sup>116</sup> —

Ṛṣabha は, Reṇu は, Aṣṭaka は,

誰であれ, 兄弟である<sup>117</sup> 君たちは,

彼が最上位の者(最年長者)であることに<sup>118</sup> 自らを合わせよ」(G25)

と。

## VII 18 (~ ŚānŚrSū XV 26 途中-27||)

(1) その Viśvāmitra には 101 の息子たちがあつた。まさしく 50 人は Madhucchandās よりも年長であつた。50 人は年少であつた。(2) そのことを年長であつた者たちは善いとは(うまくは)思わなかつた。彼らを(Viśvāmitra は)呪つた<sup>119</sup>, 「辺境<sup>120</sup> を君たちの子孫は自らに分け与えるが

「君は言つてほしい, 言うべきだ, 言つてよい」の方が自然であるが, それ故に,むしろ, 二次的改変(円滑化)とも考えられる。

<sup>114</sup> *bharataṛṣabha*: RV の正書法, 韻律上は -ar-。

<sup>115</sup> AB *āmantryām āsa* :: ŚānŚrSū -*cakre*, cf. n.38; 3. 「迂説完了」

<sup>116</sup> *śṛṇotana* Iptv. 2.Pl はヴェーダ語の語尾 -*tana* による。

<sup>117</sup> AB *sthana* はヴェーダ語の語尾による。ŚānŚrSū は *sthā asmai* (v.l. *sthāsmāi*) に改変(語形, Pāda の区切りとも不明)。

<sup>118</sup> *asmai jyaiṣṭhāya*: Kasusattraktion, AiSynt. 149f. の例を見よ, cf. n.136。

<sup>119</sup> *anu-vy-ā-har/hṛ* の意味, PW に従う (Br., Ep. からの例が挙げられる)。あるいは, 単に「言いつけた, 申しつけた」とも。

<sup>120</sup> AB Pl. *antān* :: ŚānŚrSū *antam* Sg. *prajā-* は「子孫」を意味する場合には通常単数。

よい<sup>121</sup>」と。彼らが、この Andhra, Puṇḍra, Śābara, Pulinda, Mūtiba という<sup>122</sup> 境外の多くの人々となる。Viśvāmitra の子孫たちは Dasyu（異部族）の者たちの間に最も多い。<sup>123</sup>

(3) すると (→ n.92) Madhucchandās は (他の、年少の) 50 人とともに言った<sup>124</sup>,

「我々の父が同意すること、  
その中に我々は留まる。  
先に君を、皆、立てる。  
君に付き従う者たちで我々はある<sup>125</sup>」(G26) と。

<sup>121</sup> *bhakṣiṣṭa*: cf. NARTEN Sigm.Aor. 180: s-Aor. Opt.-Prek. は mantra の言語より後には例外的にしか新たに作られることがないため、ここは、呪いの句として mantra の言語に相当する古語とする。しかし、*bhaj* (Akt. 「分かち与える」、Med. 「配分に与る<自らに分かち与える」) の Med. から Prek. を作る場合にはいずれにしてもこの語形になる。さらに、Gorō Morphology 94 n.219 参照。

<sup>122</sup> 列挙の *iti*, cf. OERTEL Syntax p.11. 同所に補うべし。

<sup>123</sup> ŚānŚrSū 「...という、境外の（北方の、とも）幾多の Dasyu たちである。Viśvāmitra の子孫たちは Dasyu の者たちの間に最も多いと [人々は] 言っている（口にしてはいる）」。ŚānŚrSū は Pulinda を欠き、Mūtiba の代わりに Mūcipa を持つ。ここに挙げられる部族名は、Andhra を除き、インドアーリヤ語とは考えられない特色をもっている。G25 の Viśvāmitra の言から見ても、Viśvāmitra は年長の 50 人の兄弟を除いて、Madhucchandās 以下の 50 名を手元に置き、Śunaḥṣepa を筆頭者として家系を継がせようと考えたと思われる。年上の 50 名については、辺境地方に派遣して、自力で一種の植民活動に当たらせ、自活させたように思われる。（ヒッタイト王国、ミタンニ王国、ゲルマン民族大移動、フランク王国等々に見られるごとく、インド・ヨーロッパ語族の諸民族に長期間に亘って見られた拡大方法である。）Cf. JB III 146 *yadā vai pitā putram niravasayayati uttarato vāva sa tam niravasayayati* 「父が息子を移民させる（他へ入植させて締め出す）場合には、北へと彼はそれ（息子）を移民させるのだ」、さらに RAU Staat und Gesellschaft 14 参照。辺境の Viśvāmitra の子孫の部族名が非インドアーリヤ系であることは、彼らがやがて現地の部族に吸収されてしまったことを示しているかもしれない。後藤『国際哲学研究』3 (2014) 51, 53 参照。西村『論集』43 (2016) 174f. 参照。

<sup>124</sup> ŚānŚrSū 「すると、Madhucchandās を始めとする年少の者たち、彼らは善いと思った。そこで (*sa*) Madhucchandās は歌った」。

(4) すると, Viśvāmitra は（正式に）応じられて<sup>126</sup> 息子たちを称えた,

(5) [~ ŚānŚrSū XV 27]

「そういう [君たちは], 息子たちよ, 家畜に富み,  
勇士に富む者たちとなるであろう。

私の誇り (*māna*- 自負の思い) を許し容れてくれることで,  
私を勇士をもつ者<sup>127</sup> と [君たちは] なしてくれた (Aor.) のだから。  
(G27)

(6) 先導者 Devarāta とともに

勇士に富み, Gāthin 族の者たち<sup>128</sup> よ,  
[君たちは] 皆, 成功すべき者たちである,<sup>129</sup> 息子たちよ。  
この者が, 君たちにとって, 正しい決定権を持つ<sup>130</sup>。(G28)

(7) この Devarāta が君たちの, Kuśika の者たちよ<sup>131</sup>,

<sup>125</sup> *smasi* はヴェーダ語の語尾による。

<sup>126</sup> *pratīta-* 「応じられて, 応じて, 理解されて, 納得して, 喜んで」などと翻訳可能であるが, 正式の言挙げという法律概念 (→ n.110, n.112) が背景にあるものと思われる。「応じた (正式に受諾した)」と訳した VII 16,10 *pratīyāya* 参照。

<sup>127</sup> 「勇士をもつ者, 勇者に富む者」の勇士とは Śunaḥśepa を指すものであろう。

<sup>128</sup> *gāthina-* *gāthin-* から作られた父祖系名, cf. Pāṇ VI 4,165。

<sup>129</sup> *rādha(i)yāḥ stha* はもともと \**yās stha* の意味で, \**yāstha* と読まれ (書かれ), 伝承されていたものであろう (SST~ST)。ŚānŚrSū の \**yāsthās tu* はこの段階から崩れたものと考えられる。

<sup>130</sup> *eṣa vaḥ sadvivācanaḥ*: おそらく *idaṃ bhavati/asti* 「彼がこの [支配権] に至る, をもっている; ...を管轄している」の構文 (HOFFMANN Aufs. 557-559, 後藤『印度学仏教学研究』55-2, 2007, (220)-(223), Goṛō Gs. Elizarenkova, 2008, 115-122) による, 法律的表现であろう。ŚānŚrSū *eṣa vas tad vivācanaḥ* はこれを解しかねて, *sadvivācanaḥ* のような Bahuvrīhi に変え, さらにそれから崩れたものかと推測される (「この者が, そこで, 君たちの決定者だ」)。

<sup>131</sup> 父祖名を Pl. (elliptischer Pl.) にするだけで一族の者たちを意味する用法, cf. DELBRÜCK AiSynt. 102. Kuśika と Viśvāmitra との関係については n.139 参照。

勇者である。彼に従え。

君たちと、私の遺産〔と〕に（彼は）与かり至ることになろう<sup>132</sup>、

そしてまた、〔我々が〕知っている<sup>133</sup> 知識にも。〕<sup>134</sup> (G29)

(8) 彼ら Viśvāmitra の子たちは一致して、

皆もろともに恵みを分かち合い、<sup>135</sup>

Devarāta を長として服従した、

〔一族が〕堅固であるように、Gāthin の者たちは。<sup>136</sup> (G30)

(9) Devarāta は聖仙 (Ṛṣi) として、

両の遺産の上に、定め置かれた<sup>137</sup>、

<sup>132</sup> *yuṣmāms ca dāyaṃ ma upetā* - - - - (.) - - - (Śloka としては Vipulā 3 タイプ)。 *ma upetā* の *a-u* は一音節扱い。 *āu > au*, *āi > ai* の変化が既に完了していたものと考えられる。 Cf. G4 *sa iravatī* (n.13). *upetā* は Fut. II で、元来 \**upaitā* が求められるが、Gorō Materialien I (1990) 997 に挙げられる Fut. -*iṣya*<sup>ti</sup> と同様、*ay/i* の一連の例外語形の一つと考えるべきである。 Fut. II には、正規の *etā* に依るもの (ŚB+) の他には、*pretāsmi* AB VIII 15,3<sup>m</sup>, *pretāsi* ib. 2<sup>m</sup> およびこの箇所 *upetā* が知られるのみである。 ŚānŚrSū は 3.Sg. Med. Iptv. を用いて *copetām* とするが、*ay/i* には元来 Med. 形はなく (cf. Gorō 同所 995), AB の一見困難な音節および語形に起因する崩れであろう。

<sup>133</sup> *vidmasi*: 元来 Perf. 形である *veda*, *vidma* から作られた過去形 (所謂 Plusquamperfekt) *avet*, \**avidma* から逆に作られた第 2 類現在語幹にヴェーダ語の語尾を付した形、他に AVP に用例がある。 1.Pl. 形としては、他に *vidmas* Kh AVP BĀU ŚvetU Ep. Kl. が見られる。「我々が知っている知識」は G23 の *daiva-dāya*-, G31 の *daiva-veda*- に当たる。

<sup>134</sup> ここで、Viśvāmitra の言は終わると考えられるが、*iti* を欠く。次の二偈は語りの偈である。

<sup>135</sup> この Pāda は RV VIII 27,14b *viśve sākaṃ sarātayaḥ* の *viśve* を *sarve* に変えた改作。

<sup>136</sup> G26 参照。 *devarātāya tashire ... śraiṣṭhyāya*: Dat. の Attraktion については AiSynt. 149f. 参照, cf. G25 (n.118)。 ŚānŚrSū d *jyaiṣṭhye śraiṣṭhye ca* は *dhr̥tyai* という別の価値の Dat. を避け、Lok.+*sthā* の構文 (cf. G26) に変えて滑らかにした改作であろう。



Jahnu 一族の支配権と、  
Gāthin 一族の神々に属する Veda<sup>138</sup> との上に。<sup>139</sup> (G31)

(10) 以上が、この 100 の ṛc (R̥gveda の詩節) のほかにさらに歌 (*gāthā*-) をもつ<sup>140</sup> Śunaḥśepa の物語である。(11) それを Hotar が (Rājasūya 祭において、即位の) 灌頂を受けおえた王のために語る。(12) 金の敷き座に座って語る。金の敷き座に座って (Adhvaryu は) 応唱する (合いの手を入れる)。金は名声である。<sup>141</sup> ほかならぬ名声を、当の者 (王) に、それによって、完備させることになる。(13) 「*om*」が ṛc に対する応唱である、同様に「*tathā* (然り)」が歌 (*gāthā*-) に対する。「*om*」は神々に属するのだ。「*tathā*」は人間たちに属する。神々に属するものと人間たちに属するもの

<sup>137</sup> *adhiyata* は *dhā* の Pass. Ip̄. 3.Sg.。ŚānŚrSū *adhiyate* 「学習される、理解される」(*adhī* < *adhi-ay/i*, cf. Gorō Materialien I 1002ff.) は崩れた形と思われる。

<sup>138</sup> Veda = *brāhmaṇ*-. ManSm̄ I 23 参照。

<sup>139</sup> Viśvāmitra (*rājaputra*-, *bharatarṣi*- と呼ばれる) の一族は元来 Jahnu の系統を引く王家であり、Bharata 族の大統合の後 (R̥gveda に言及される Sudās 王の 10 王戦争を参照。Bharata を統合した Sudās 王の筆頭祭官 Purohita はもともと Vasiṣṭha), 祭官の家系である (祭官としての性格を主とする) Gāthin 家を (養子として?) 継いで、Bharata 族 (全体の) 祭官 (Purohita) となったものかと推測される: Kuśika — Gāthin — Viśvāmitra — Śunaḥśepa = Devarāta — Madhucchandasa. ヴェーダ文献に見られる言及については、MACDONELL-KEITH の各項目下を参照のこと。さらに、LOMMEL Oriens 18-19 (1965/1966) 200-227 = Kleine Schriften 480-507, CHAUBEY 1987 参照。ŚānŚrSū は「そして、Jahnu に属する者たちとして、彼らは支配した、そして、神の Veda を、Gāthin の子孫たちは」。おそらく、AB が韻律上 *jahnūnaam* または *ca ādhipatyē* と読まねばならない (Śloka としては、いずれにしても Vipulā 4 タイプ) のを避けて、改作したものであろう。

<sup>140</sup> AB *paraṛkṣatagāthā*- 「100 (または、幾 100) の ṛc- (*ṛkṣata*- は Br. 以降現れる実体詞 + 数詞のタイプ, cf. AiG III 372: γ) を越えて *gāthā*- をもつ、に特色づけられる」(*aṛ* の「正書法」については cf. n.71)。ŚānŚrSū は *paraṛkṣatarggāthā*- 「100 以上の ṛc- と *gāthā*- とをもつ」または「100 以上の ṛc を伴った *gāthā* よりなる」とする。*ar* の連続を避けたものかもしれない。ŚānŚrSū は更に *aparimita*- 「計り知れない、数え切れない」を付す。

<sup>141</sup> または: 「名声を支配する」, cf. n.130。

とによって、当の者を、それによって、悪をもたらす罪過から (ŚānŚrSū あらゆる罪過から) 解き放つ。(14) それ故、もし王が最終的勝利を得た者である場合には、祭式 (Rājasūya) を挙行しない場合でも、この Śunaḥśe-pa に関する物語を語ってもらうがよい。彼には、つまり、小さな罪過さえも残らない。(15) (牛) 1000 (頭) を語り手 (Hotar) に与えるがよい。100 (頭) を応唱者に。そして、この両の敷き座をも。そして、白い、雌騾馬の牽く戦車が Hotar のものである (この文 ŚānŚrSū 欠)。(16) 息子を欲する者たちも、すなわち、語ってもらうがよい。彼らは、すなわち、息子たちを手に入れる。

## 2. 韻律について

gāthā は、(1) G1-G11, (2) G12-G16, (3) G17-G21, (4) G22-G29, (5) G30-31 のグループに分けられる。いずれも、主として anuṣṭubh より成る。

G6 と G11~(G9a) は triṣṭubh である。G6 は c の *duhitā* を /*dhītā*/ と読むことにより、正規の triṣṭubh 形が得られる。G11c *tam paśyanti paśavo vayāmsi ca* (AB) は、opening (Öffnung) 4 音節 - - - ♪ + break (Mittelstück) 2 音節 ♪ ♪ + cadence (Kadenz) - ♪ - ♪ ♪ による unterzählig (1 音節不足) の jagatī (本来 12 音節) と判断される。G11d *tasmāt te mātṛāpi mithu-nībhavanti* は、/mātṛā 'pi/ と読んで mātṛā までの 5 音節の後ろに caesura (Zäsur) を想定、'pi mithu ♪ ♪ ♪ という break を伴う überzählig (1 音節過剰) の triṣṭubh と考えられる。G11 の平行である ŚānŚrSū (G9a) は、b が überzählig, c が unterzählig, d は AB G11d と同じく überzählig の triṣṭubh と判断される。

残りの anuṣṭubh による 29 詩節は、G15b と G25d とを除き、偶数行 (bd) が全て ♪ - ♪ ♪ に終る点で、Śloka に近い形態を示す。G15b の *dvāparaḥ* の行頭 2 子音を 1 子音として読めば (*d''āparaḥ*, cf. Pali *bārasa-* < *dvādaśa-* 「12」), G15 全体は Śloka の bha-Vipulā に当たる。G25d は ♪ - - - で終わるが、abc が揃って ♪ - ♪ ♪ を示すので奇数行 :: 偶数行の対比が見られず、Śloka 以前の anuṣṭubh である。他に、G1c, G4c, G12c, G16a, G30c

が奇数行終結部に  $\cup - \cup \cup$  をもつ。ŚānŚrSū G16a は 4 行全て  $\cup - \cup \cup$  に終わる。Śloka の代表形式である pathyā に当たる行は、G1a, G2c, G3a, G5c, G7c, G14c, G16c, G17c, G18c, G19c, G20a, G21c, G24a, G27c, G29a である。従って、ここに見られる gāthā は、概ね、古い anuṣṭubh から Śloka (奇数行と偶数行が対比される。つまり、4 行詩から 2 行詩へ移行) への過渡期に位置づけられる。Śloka に異例な形は、G3c, G9c, G10c, G22a, G26c 終結部に見られる  $---\cup-$ 、同じく G13a の  $\cup---$  である。sandhi にも Ep. Kl. には見られなくなる古い形態が残る。

### 3. 迂説完了 (periphrastisches Perfekt)

Śunaṣṣepa の物語において注目される語形の一つに periphr. Perf. がある。periphr. Perf. は AV 以降現れ (AV XVIII 2,27 *gamayāṃ cakāra*: Kaus. *gamāyati* 「行かせる」の完了形), Perf. が語りの過去を表すテンスとして一般化する Br. に多く見られるようになる。 $^{\circ}\acute{a}m$  の形に *kar/kr̥* の完了形を付して表すのが普通である。Med. を表示し得ない *as/s* の完了形を用いる例はより新しく、かつ、稀であるが、ここには、AB に 2 回、ŚānŚrSū に 2 回見られる。いずれも、パラレルは *cakre, cakāra*。WHITNEY 394 はさらに、*janayām āsa* ŚvetU (III 4), *āmantrayām āsa* GopBr (I 2,10:43,12, I 2,18:52,3, I 3,6:70,7) を挙げる。WHITNEY Skt.Gramm.<sup>2</sup> 392ff., 特に 394: §1073d, BÖHTLINGK-GARBE (1909) 394, Gotō Morphology 123f.<sup>142</sup> 参照。<sup>143</sup>

#### 迂説完了形一覧

<sup>142</sup> 同所 n.272 は、例えば、*gamayāṃ cakāra* が 2 語扱い、(複合動詞の前置詞の場合のように) 1 語と見なされるか確定できないとしているが、既に WHITNEY Skt.Gramm.<sup>2</sup> 394:1073e が ŚB XI 2,3,8 *sá yád atirecayāṃ cakrūḥ* (～ ŚBK III 2,8,4 *sá yád átiriktaṃ āsa*) を根拠に指摘している事実を見落としている。つまり、2 語扱いであり、Gotō Morphology 123 n.272 は訂正すべきである。

<sup>143</sup> *bhav<sup>i</sup>/bhū* との結合は極めて例外的で、用例は Ep., Kl. に限られる。Pāṇ III 1,40 は *kar/kr̥* による形成のみを教え、Kātyāyana と Patañjali は *as* および *bhav<sup>i</sup>/bhū* による形成をも認める。Cf. AiG II-2 256.

AB VII 14,8 sa tathety uktvā putram *āmantrayām āsa*

～ ŚānŚrSū XV 18:190,1 ... *āmatrayām cakre*

AB VII 15,7 tau ha madhyame saṃpādayām cakratuḥ

= ŚānŚrSū XV 20:191,18

AB VII 16,3 atha ha śunaḥśepa *ikṣām cakre*

～ ŚānŚrSū XV 21:192,10 ... *ikṣām āsa*

AB VII 17,1 *atha hāsminn* anvārabdhe pūrvābhiś catasṛbhiḥ *sasvāhākā-rābhir* juhavām cakāra

= ŚānŚrSū XV 23:193,13 *athāsminn* anvārabdha *etasyaiva sūktasya* pūrvābhiś catasṛbhir juhavām cakāra

AB VII 17,1 *athainam ata ūrdhvam* agnim *āhavanīyam upasthāpayām cakāra* ... iti

～ ŚānŚrSū XV 23:193,26 *athahainam* agnim *upasthāpayām āsa* ... ity *etayārcā* ||

AB VII 17,7 atha ha viśvāmitraḥ putrān *āmantrayām āsa*

～ ŚānŚrSū XV 25:194,22 ... *āmantrayām cakre*

ŚānŚrSū XV 20:191,21 sa tathety uktvā varuṇam rājānam *āmantrayām cakre*

～ AB VII 15,8 sa varuṇam rājānam *upasasāra*

#### 4. 索引若干

Sandhi など

RV 派の *-aṛ-* n.71, n.114, n.140, Text n.16; *u* と *v* n.95; *ma upetā /maupetā/* n.132, n.13; *sa irāvati /sairāvati/* n.13, G4.

ヴェーダ語形, 語法 Vedic forms n.102 (中性複数 *-ā*); n.107 (Inj.); n.108 (Konj.); n.116 (Iptv. 2.pl. *-tana*); n.117 (Ind. 2.Pl. *-thana*); n.125, n.133 (Ind. 1.Pl. *-masi*).

動詞語形 verbal forms n.98 (*adarśur, adrākṣur*); n.101 (*ni-hnuve, ni-hnave*); n.104 (*māpagās*); n.121 (*bhakṣiṣṭa*); n.132 (Fut.II *upetā*), n.46 (Konjunktiv, subjunctive *carāti*).  
—— 新しい語形 n.38 (*āsa* による迂説完了), n.45

	( <i>śerate</i> ). — <i>jan<sup>i</sup></i> n.3, n.14, n.21, n.27, n.31; <i>labh</i> ( <i>alapsata</i> , <i>alipsata</i> ) n.99; <i>śas</i> と <i>sās/śiṣ</i> n.65, n.107; <i>vi-hvā/hū</i> , <i>vihvaya-</i> n.95, n.96.
Optativ, optative	n.81, n.110, n.112, n.121.
Imperfekt	G18, n.11, n.37, n.59, n.91, n.93, n.137.
Aorist	G18, G20, G21, G27, n.31, n.33, n.36, n.37, n.91, n.93, n.97, n.121.
Perfekt	n.2, n.11, n.26, n.29, n.36, n.37, n.59, n.77, n.78, n.133; 3..
補完活用, Suppletion, suppletion	n.29, n.33, n.70
Kontaminierung, contamination, 混交	n.35
vṛddhi 派生, 形成法	n.2, n.35.
Inhaltsakkusativ, content accusative	n.24, n.83.
Kasusattraktion, case (dative) attraction	n.118, n.136.
Kongruenz, concorde, agreement, 一致	n.13, n.23.
代名詞 pronoun, 文頭の代名詞, <i>sa</i>	VII 17, n.92.
<i>idam</i> + <i>bhū/as</i> 構文	n.21, n.130, n.141.
elliptischer Plural	n.131.
<i>tṛcā-, tricā-</i>	n.72.
<i>prajā-</i>	n.120.
<i>sma</i>	n.26, n.71, n.77, n.78, n.79.
<i>ha, itihāsa</i>	n.2, n.11, n.18, n.26, n.59, n.77, n.78, n.79, n.81.
Pāṇini	n.11, n.45, n.87, n.95, n.128, n.143.
苦行者 ascetics, 伝統的世界観と革新的の学者	n.14, n.18; n.41 ( <i>śram, śramaṇa</i> ).
Varuṇa	VII 14,1-8, VII 15,1,8, VII 16,6, VII 17,1; n.31, n.42, n.56, n.89; n.42 (Varuṇa と Indra).
Indra	VII 15,1-5 (+ ŚānŚrSū XV 19:191,8), VII 16,9-11; n.25, n.41, n.42, n.53, n.74,
Viśvāmitra	VII 16,1, VII 17,2; 5-7, VII 18,1,2,4,8, n.96, n.106, n.109, n.111, n.122, n.131, n.134, n.139.

Vasiṣṭha	VII 16,1, n.63, n.139.
Aṅgiras	G17, G18, G22, n.100.
Ajīgarta	VII 15,6, VII 16,1-4, VII 17,2, G17, n.51.
Sūyavasa	VII 15,6, VII 16,1-4, G21, n.51.

## 5. 略語表，文献一覧

（本論文では，anusvāra の表記に *m̐* を，anunāsika に *m̐* を用いる。→ Text n.1）

AĀ	Aitareya-Āraṇyaka
AB	Aitareya-Brāhmaṇa
AiG	Altindische Grammatik → WACKERNAGEL
AiSynt.	Altindische Syntax → DELBRÜCK
AU	Aitareya-Upaniṣad
Akk.	Akkusativ, accusative
Aor.	Aorist
ĀpDhSū	Āpastamba-Dharmasūtra
AV	Atharvaveda
AVP	Atharvaveda-Paippalāda
BĀU	Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad (Mādhyandina)
BĀU-K	同 (Kāṇva)
BaudhDhSū	Baudhāyana-Dharmasūtra
Br.	Brāhmaṇa(s)
ChU	Chāndogya-Upaniṣad
Dat.	Dativ, dative
Ep.	Epic Sanskrit
EWAia	Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen → MAYRHOFER
Fut.	Futur, future
GautDhSū	Gautama-Dharmasūtra
Gen.	Genitiv, genitive
GopBr	Gopatha-Brāhmaṇa

Ind.	Indikativ, indicative
Inj.	Injunktiv, injunctive
Instr.	Instrumental
Ipf.	Imperfekt, imperfect
Iptv.	Imperativ, imperative
KaṭhU	Kaṭha-Upaniṣad
KauṣUp	Kauṣītaki-Upaniṣad
Kh	Ṛgveda-Khila
Kl.	Klassisches Sanskrit, Classical Sanskrit
Konj.	Konjunktiv, subjunctive
KpS	Kaṭhā-Upaniṣad-Saṃhitā
KS	Kaṭha-Saṃhitā
Lit.	「文献の列挙あり」
Lok.	Lokativ, locative
m	mantra
ManSmṛ	Manu-Smṛti
MānŚrSū	Mānava-Śrautasūtra
MBhār	Mahābhārata
MS	Maitrāyaṇī Saṃhitā
Opt.	Optativ, optative
p	Prosa (“ <i>brāhmaṇa</i> .”)
Pāṇ	Pāṇini (Aṣṭādhyāyī)
Part.	Partizip, participle
Perf.	Perfekt, perfect
periphr.	periphrastisch, periphrastic
Pkt.	Prākṛt (Mittelindiarisch, Middle Indo-Aryan)
PW	→ BÖHTLINGK-ROTH
RV	Ṛgveda
ŚānŚrSū	Śāṅkhāyana-Śrautasūtra
ŚB	Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina)

ŚBK	同 (Kāṇva)
Sigm.Aor.	Sigmatische Aoriste: -s-, -iṣ-, -sa-, -siṣ-aorists
SN	Suttanipāta (pāli)
ŚrSū.	Śrautasūtra(s)
ŚvetU	Śvetāśvatara-Upaniṣad
TĀ	Taittirīya-Āraṇyaka
ᵛ	Vers (śloka, gāthā とよばれる世俗の韻文)
ViṣṇSmṛ	Viṣṇu-Smṛti
ViṣṇuDhUPur	Viṣṇu-Dharmottara-Purāṇa
YājñSmṛ	Yājñavalkya-Smṛti
YS	Yajurveda-Saṁhitā(s)

**AB 関係**（注記に直接触れないものをも含む。）

Ed. AUFRECHT	Theodor AUFRECHT, Das Aitareya Brāhmaṇa. Mit Auszügen aus dem Commentare von Sāyaṇācārya und anderen Beilagen. Bonn 1879.
Ed. Nirṇayasagar	Aitareyabrāhmaṇa. Bombay 1925.
Ed. HAUG	Martin HAUG, The Aitareya Brahmanam of the Rigveda. Edited, translated and explained. 2 vols. Bombay-London 1863.
Ed. Bibl.Ind.	The Aitareya Brāhmaṇa of the Ṛg-veda, with the commentary of Sāyaṇa Āchārya. Ed. by Satyavrata SĀMAŚRAMĪ. 4 vols. Calcutta 1895, 1896, 1896, 1906.
Ed. ĀnandāśSS	Ānandāśramasaṁskṛtagranthāvaliḥ 32: Aitareya-brāhmaṇam. Śrīmatsāyaṇācāryaviracitabhāṣyasa-metam. 2 vols. 2nd ed. Poona 1930, 1931 ( <sup>1</sup> 1896).
Ed. MALAVIYA	The Aitareya Brāhmaṇa of the Ṛgveda, with the commentary Vedārtha-prakāśa of Sāyaṇācārya and 'Sarala' Hindi translation. Edited & translated by Sudhakar MALAVIYA, 2 vols. Varanasi 1980, 1983.



- Ed. Nag Publishers      The Aitareyabrāhmaṇa. [With the vṛtti Sukhapradā of Śaḍguruśiṣya from Chs. 1-32 & Sāyaṇa's Commentary from Chs. 33-40]. 3 vols. Revised & enlarged edition, Mirzapur 1991.
- Ed. Trivandrum      Aitareyabrāhmaṇa. With the Vṛtti Sukhapradā of Śaḍguruśiṣya. Vol. I. 1-15 Adhyayas. Ed. by R. ANANTAKRṢṢNA ŚĀSTRĪ. Trivandrum 1942. Vo. II. 16-25 Adhyayas. Ed. by P. K. NARAYANA PILLAI. Trivandrum 1952. Vo. III. 26-32 Adhyayas. Ed. by Suranad KUNJAN PILLAI. Trivandrum 1955. Trivandrum Sanskrit Series 149, 167, 176. (Śaunaḥśepam の直前までで Ed. 終わる。)

### ŚānŚrSū 関係

- Ed. HILLEBRANDT      The Śāṅkhāyana Śrauta Sūtra, together with the commentary of Varadattasuta Ānartīya. Vol. I. Text of the Sūtra, critical notes, indices. Calcutta 1888 (Bibliotheca Indica 99).
- STREITER DISS.      Fridericvs STREITER, De Sunahsepo, fabla indica ex codicibvs manvscriptis edita. Dissertatio inavgvralis. Berolini 1861.

### 二次文献

- H. W. BODEWITZ      Jaiminiya Brāhmaṇa I, 1-65. Translation and commentary, with a study agnihotra and prāṇāgnihotra. Leiden 1973.
- Otto BÖHTLINGK-Rudolph ROTH      Sanskrit-Wörterbuch. 7 Bände. St. Petersburg 1855-1875. [PW]
- Otto BÖHTLINGK      Sanskrit-Chrestomathie. 2., gänzlich umgearbeitete Auflage. St. Petersburg 1877.

- Otto BÖHTLINGK “Grammatische Absonderlichkeiten im Aitareja-brâhmaṇa”. Berichte über die Verhandlungen der Königlich Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften zu Leipzig (BKSGW), Philosophisch-historische Klasse, 52 (1900) 413-421.
- BÖHTLINGK-GARBE Sanskrit-Chrestomathie von Otto Böhntlingk. Hrsg. von Richard GARBE. Leipzig 1909.
- W. CALAND “Zur Exegese und Kritik der rituellen Sūtras, XVIII-XXVII”, ZDMG 53 (1899) 205-230, 388 = Kleine Schriften, Stuttgart 1990, 44-69.
- W. CALAND Altindische Zauberei. Darstellung der altindischen “Wunschopfer”. Amsterdam 1908.
- CALAND-HENRY L’agniṣṭoma. Description complète de la forme normale du sacrifice de soma dans le culte Védique, par W. CALAND, V. HENRY. 2 tomes. Paris 1906.
- George CARDONA “The Old Indo-Aryan tense system”, JAOS 122-2 (2002) 235-243.
- B. B. CHAUBEY (Ed.) Viśvāmitra in Vedic and Post Vedic Literature. Hoshiarpur 1987.
- Bertold DELBRÜCK Altindische Syntax. Halle an der Saale 1888.
- Berthold DELBRÜCK Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen II. Strassburg 1897. (BRUGMANN-DELBRÜCK Grundriss der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen IV)
- 堂山英次郎 『リグヴェーダにおける 1 人称接続法の研究』 大阪大学大学院文学研究科紀要 45-2 (2005), xv + 347pp.
- Julius EGGELING The Śatapatha-Brājmaṇa. According to the text of the Mādhyandina school. 5 parts. Oxford 1882-1900.
- Harry FALK “Die Legende von Śunaḥśepa vor ihrem rituellen Hintergrund”, ZDMG 134 (1984) 115-135.

- Harry FALK “Vedische Opfer im Pali-Kanon”, BEI 6 (1988) 225–254.
- Karl Friedrich GELDNER Der Rig-Veda. Aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt und mit einem laufenden Kommentar versehen. 3 Bde. Cambridge, Mass. 1951.
- J. GONDA “The pronoun *ka* and the proper name *ka*” ALB 50, Golden Juilee Volume (1986) 85–105 = Selected Studies. Volume VI, Part 2. Leiden 1991, 449–469.
- J. GONDA The Savayajñas (Kauśikasūtra 60–68). Translation, introduction, commentary. Amsterdam 1965.
- Toshifumi GOTO “*rabh- : labh- + ā* in der vedischen Literatur”, 『印度学仏教学研究』 24-2 (1976) 1015–1007.
- Toshifumi GOTO Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen. Wien 1987. 2. Auflage 1996.
- Toshifumi GOTO “Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen: 1. *am<sup>i</sup>*, 2. *ay/i*, 3. *as/s*”, 『国立民族学博物館研究報告』 Bulletin of the National Museum of Ethnology (Osaka) 15-4 (1990[1991]) 987–1012.
- 後藤敏文 「呪法の起源」, 『インドの夢・インドの愛——サンクリット・アンソロジー』, 上村勝彦, 宮元啓一編, 春秋社 1994, 50–53.
- 後藤敏文 「Chândogya-Upaniṣad IV 1-3 『Pautrāyaṇa と Raikva』, 『印度学仏教学研究』 42-2 (1994) 1041–1035.
- 後藤敏文 「Veda 祭式の brahmodya と Saṃyutta-Nikāya I 1,2, 3」, 『印度学仏教学研究』 43-1 (1994) 486–481.
- Toshifumi GOTO “Zur Geschichte vom König Jānaśruti Pautrāyaṇa (Chândogya-Upaniṣad IV 1-3)”, Studien zur Indologie und Iranistik 20 = Festschrift Paul Thieme zum 90. Geburtstag (1996) 89–115.
- 後藤敏文 「Śaṇḍilya の教説再考—Brāhmaṇa と Upaniṣad と

- の間—, 『今西順吉教授還暦記念論集「インド思想と仏教文化」』春秋社 1996, 860-844.
- Toshifumi Gorō “Zur Lehre Śāṇḍilyas —Zwischen Brāhmaṇa und Upaniṣad—”, *Langue, style et structure dans le monde indien. Centenaire de Louis Renou. Actes du Colloque international, Paris, 25-27 janvier 1996, Paris 1996*[1997], 71-89.
- Toshifumi Gorō “‘Purūravas und Urvaśī’ aus dem neuentdeckten Vādhūla-Anvākhyāna (Ed. IKARI)”. *Anusantatyai. Festschrift für Johanna Narten zum 70. Geburtstag. Dettelbach 2000*[2001], 79-110.
- Toshifumi Gorō “Funktionen des Akkusativs und Rektionsarten des Verbuns —anhand des Altindoarischen—”, *Indo-germanische Syntax —Fragen und Perspektiven—, Wiesbaden 2002*, 21-42.
- 後藤敏文 「荷車と小屋住まい: ŚB *śālām as*」, 『印度学仏教学研究』55-2 (2007) 809-805.
- Toshifumi Gorō “Reisekarren und das Wohnen in der Hütte: *śālām as* im Śatapatha-Brāhmaṇa”, *Indologica. T. Ya. Elizarenkova Memorial Volume, Book 1. Moscow 2008*, 115-125.
- 後藤敏文 「「業」と「輪廻」—ヴェーダから仏教へ—, 『印度哲学仏教学研究』24 (2009) 16-41.
- Toshifumi Gorō Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background, in co-operation with Jared S. KLEIN and Velizar SADOVSKI. Wien 2013.
- 後藤敏文 「インド・アーリヤ諸部族のインド進出を元に人類史を考える」, 『国際哲学研究』3 (2014) 43-57. (同ドイツ語版 231-248.)
- 後藤敏文 「Śvetāśvatara-Upaniṣad の言語について」, 『国際

- 仏教学大学院大学研究紀要』21（2017）45-90.
- J. C. HEESTERMAN      The Ancient Indian Royal Consecration. The Rājāsūya described according to the Yajus texts and annotated. 's-Gravenhage 1957.
- Alfred HILLEBRANDT      Ritual-Litteratur. Vedische Opfer und Zauber. Strassburg 1897.
- Karl HOFFMANN      Der Injunktiv im Veda. Eine synchronische Funktionsuntersuchung. Heidelberg 1967.
- Karl HOFFMANN      Aufsätze zur Indoiranistik. Band 1. Wiesbaden 1975, Band 2. 1976.
- Paul HORSCH      Vedische Gāthā- und Śloka-Literatur. Bern 1966.
- Arthur Berriedale KEITH      Rigveda Brahmanas. The Aitareya and Kauṣītaki Brāhmaṇas of the Rigveda. Cambridge, Mass. 1971.
- Konrad KLAUS      Die Wasserfahrzeuge im vedischen Indien. Stuttgart 1989.
- Hertha KRICK      Das Ritual der Feuergründung (*Agnyādheya*). Wien 1982.
- H. LOMMEL      “Die Śunaḥśepa-Legende”, ZDMG 114 (1964) 122-161 = Kleine Schriften, 1978, 440-479.
- H. LOMMEL      “Vasiṣṭha und Viśvāmitra”, Oriens 18/19 (1965/1966) 200-227 = Kleine Schriften, 1978, 480-507.
- Heinrich LÜDERS      Philologica Indica. Ausgewählte kleine Schriften. Festgabe zum siebenzigsten Geburtstage am 25. Juni 1939. Göttingen 1940.
- A. A. MACDONELL      Vedic Grammar. Strassburg 1910.
- MACDONELL-KEITH      Vedic Index of Names and Subjects. By Arthur Anthony MACDONELL and Arthur Berriedale KEITH. 2 vols. London 1912.
- 松濤誠達      「シュナツハシェーパ説話の意味」, 『大正大学研究紀

- 要』 67 (1982) 1-18.
- Manfred MAYRHOFER Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen [EWAia]. 3 Bde. Heidelberg 1992-2001.
- Armand MINARD Trois énigmes sur les cent chemins. Recherches sur le Śatapatha-Brāhmaṇa. tome I. Paris 1949, tome II 1946.
- 西村直子 「ヴェーダ文献における胎児の発生と輪廻説」, 印度学宗教学会『論集』 36 (2009) 100(69)-76(93).
- 西村直子 「Ṛgveda X 128 Vihavya-Sūkta の展開」, 『印度学仏教学研究』 63-2 (2015) 252-258.
- 西村直子 「ヴェーダ文献に辿る「祭主の人生」」, 印度学宗教学会『論集』 43 (2016) 186(137)-164(159).
- Hanns OERTEL The Syntax of Cases in the Narrative and Descriptive Prose of the Brāhmaṇas. I. The Disjunct Use of the Cases. Heidelberg 1926.
- Hanns OERTEL Zu den Kasusvariationen in der vedischen Prosa. 2. Teil. München 1938 = Kleine Schriften, Stuttgart 1994, 1013-1102.
- Asko PARPOLA The Śrautasūtra of Lāṭyāyana and Drāhyāyana and their commentaries. An English translation and study. Vol. I: 1, 2. Helsinki 1968, 1969.
- Wilhelm RAU Staat und Gesellschaft im alten Indien. Nach den Brāhmaṇa-Texten dargestellt. Wiesbaden 1957.
- Wilhelm RAU “Fünfzehn Indra-Geschichten”, Asiatische Studien, Études Asiatiques 20 (1966) 72-100.
- Wilhelm RAU “Twenty Indra legends”, German Scholars on India, Vol. I, Varanasi 1973, 199-223 = Kleine Schriften, Wiesbaden 2012, 1197-1221.
- Louis RENOU Vocabulaire du rituel védique. Paris 1954.
- Rudolph ROTH “Die Sage von Çunaḥçepa”, Indische Studien 1

- (1850) 457-464. (AB の訳)
- Junko SAKAMOTO-GOTŌ “Das Jenseits und *iṣṭā-pūrtā* ‘Die Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten’ in der vedischen Religion”, Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik. Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft vom 2. bis 5. Oktober 1977 in Erlangen, Wiesbaden 2000, 475-490.
- Rüdiger SCHMITT “Vergils *decem menses* und die indogermanische Anschauung von der Schwangerschaftsdauer”, Studi linguistici in onore di Vittore Pisani. Vol. II, Brescia, Paideia Editrice, 1969, 903-910.
- Julius SCHWAB Das altindische Thieropfer. Mit Benützung handschriftlicher Quellen. Erlangen 1886.
- Renate SÖHNEN “Das Gautamīmāhātmya und seine vedische Quellen”, o-o-pe-ro-si. Festschrift für Ernst Risch zum 75. Geburtstag, Berlin 1986, 176-195.
- Paul THIEME Das Plusquamperfektum im Veda. Göttingen 1929.
- Paul THIEME “Nennformen aus Anrede und Anruf im Sanskrit”, MSS 44 = Festgabe für Karl Hoffmann Teil I (1985) 239-258.
- 辻直四郎 『ヴェーダ学論集』 岩波書店 1977.
- 辻直四郎 『古代インドの説話—ブラーフマナ文献より—』 春秋社 1978.
- Jacob WACKERNAGEL-Albert DEBRUNNER Altindische Grammatik. I 1896, II,1 1905, II,2 1954, III 1930, Nachträge zu I, II,1 1957. Göttingen.
- Albrecht WEBER “Ueber Haug’s Aitareya-Brâhmaṇa” Indische Studien IX (1865) 177-380.
- Friedrich WELLER Die Legende von Śunahṣepa im Aitareyabrâhmaṇa und Śaṅkhāyanaśrautasūtra. Berlin 1956. = Kleine

Schriften, Stuttgart 1987, 3-92.

William Dwight WHITNEY Sanskrit Grammar, including both the Classical language, and the older dialects, of Veda and Brahmana. Cambridge, Mass. 2nd ed. 1889.

Ernst WINDISCH Buddha's Geburt und die Lehre von der Seelenwanderung. Leipzig 1908.

M. WITZEL "JB pulpūlanī. The structure of a Brāhmaṇa tale", Dr. B. R. Sharma Felicitation Volume. Tirupsti 1986, 189-216.

Michael WITZEL-Toshifumi GOTO Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster und zweiter Liederkreis. Aus dem vedischen Sanskrit übersetzt und herausgegeben von M° W° und T° G° unter Mitarbeit von Eijirō DōYAMA und Mislav JEŽIĆ. Frankfurt a.M. 2007.

Michael WITZEL-Toshifumi GOTO-Salvatore SCARLATA Rig-Veda. Das heilige Wissen. Dritter bis fünfter Liederkreis. Berlin 2013.

## 6. Text

→ pp. 135-112.





## 6. Text

Aitareya-Brāhmaṇa VII 13-18<sup>1</sup>

## VII 13

1 hariścandro ha vaidhasa aikṣavāko rājāputra āsa. tasya ha śataṃ jāyā  
babhūvus. tāsu putraṃ na lebhe. tasya ha parvatanāradau gr̥ha ūṣatuḥ. sa  
ha nāradaṃ papraccha.

- 2   yan<sup>2</sup> nv imaṃ putraṃ icchanti  
     ye vijānanti ye ca na |  
     kiṃ svit putreṇa vindate  
     tan *ma ācakṣva* nāradeti. (G1)

3 sa ekayā pr̥ṣṭo daśabhiḥ pratyuvāca. |

- 4   ṛṇam asmin saṃnayat; y  
     amṛtatvaṃ ca *gacchati* |  
     pitā putrasya jātasya

<sup>1</sup> Ed. については、文献一覧参照。AB の | は Ed.Nirṇayasagar の || を反映。ここでは Gāthā 末などで || とする。ŚānŚrSū Ed. の | と || とは原則として無視する。AB と ŚānŚrSū との間に読みの相違がある場合にイタリックで表記する。\*を付した箇所について、AUFRECHT は *ekatrinśatā, tasmiṃs tiṣṭhā* のように表記しているが（AUFRECHT は、RV-Ed. におけると同様、*n* を *ñ*, *m* を *ṃ* と表記する、cf. RV p. XLVIII）、その根拠を確かめ得ていない。他の Edd. には *anunāsika* の表記（*m̐, ṃ̐*）は一切見られず、*anusvāra* (*m̐*) で統一されている。Ed. AUFRECHT においても、VII 17,1 *saṃsthām, niditaṃ sahasrād*, G23 *putrāṇām syās*, G26 *vayaṃ smasi*, G30 *sākam sarātayaḥ*, G1 *kiṃ svit*, VII 15,2 *dvitīyaṃ saṃvatsaram*, 3 *tṛtīyaṃ...*, 4 *caturthaṃ...*, G15 *kṛtaṃ saṃpadyate*, VII 15,5 *pañcamaṃ saṃvatsaram*, 6 *ṣaṣṭhaṃ...*, *’jigartaṃ sauyavasim*, VII 16,1 *taṃ sa*, 6 *taṃ savitā*, 7 *mukhaṃ suhr̥d*, VII 17,1 *niditaṃ sahasrād* とされている。*\*n m̐ / \*ṃ m̐, \*m p̐ / \*ṃ p̐* などの sandhi は Ed.Nirṇayasagar に合わせた。

<sup>2</sup> Ed. AUFRECHT *yaṃ nv*.

Śāṅkhāyana-Śrautasūtra XV 17-27<sup>3</sup>

*naḥ prabrūhi*

*vindate*

---

<sup>3</sup> XV 章の終り。Ed. については、文献一覧参照。

paśyet cej jīvato mukham. || (G2)

- 5 yāvantaḥ pṛthivyām bhogā  
yāvanto jātavedasi |  
yāvanto apsu prāṇinām  
bhūyān putre pitus tataḥ. || (G3)

- 6 śaśvat putreṇa pitaro  
'<sub>a</sub>tyāyan bahulaṃ tamaḥ |  
ātmā hi jajña ātmanaḥ  
sa irāvaty<sup>4</sup> atitārīṇī. || (G4)

- 7 kiṃ nu malaṃ kim aḥinaṃ  
kim u śmaśrūṇi kiṃ tapaḥ |  
putraṃ brāhmāṇa icchadhvaṃ  
sa vai loko 'vadāvadaḥ. || (G5)

- 8 annaṃ ha prāṇaḥ śaraṇaṃ ha vāso  
rūpaṃ hiraṇyaṃ paśavo vivāhāḥ |  
sakhā ha jāyā kṛpaṇaṃ ha duhitā<sup>5</sup>  
jyotir ha putraḥ parame viyoman. || (G6)

- 9 patir jāyāṃ praviśati  
garbho *bhūtvā* sa mātaram |  
tasyāṃ punar navo bhūtvā  
daśame māsi jāyate. || (G7)

<sup>4</sup> *sairāvaty atitārīṇī*, → 翻訳の n.13。

<sup>5</sup> 韻律上, 中期インドアーリヤ語形 /*dhītā*/ が予想される (→ 翻訳の n.18)。

*bhūtvātha*

- 10 taj jāyā jāyā bhavati  
 yad asyām jāyate punaḥ |  
 ābhūtir eṣ<sub>a</sub>ābhūtir  
 bijam etan nidhiyate. || (G8)
- 11 devās caitām ṛṣayaś ca  
 tejaḥ samabharan mahat |  
 devā manuṣyān abruvann  
 eśā vo jananī punaḥ. || (G9)
- 12 nāputrasya loko 'sīti  
 tat sarve paśavo viduḥ |  
 tasmāt tu putro mātaraṃ  
 svasāraṃ cādhirohati. || (G10)
- 13 eṣa panthā urugāyaḥ suśevo  
 yaṃ putriṇa ākramante viśokāḥ |  
 taṃ paśyanti paśavo vayāṃsi\* ca  
 tasmāt te mātṛāpi mithunībhavantī(14)ti. (G11)<sup>6</sup>
- ha smā<sup>7</sup> ākhyāya.* ||13||

<sup>6</sup> 2. 「韻律について」の項参照。

<sup>7</sup> *hāsmā* Ed.MALAVIYA, Ed.Nirṇayasagar footnote (“bhāṣyapāṭhaḥ”), Ed.Ānandās.  
 with vv.ll., cf. WEBER Ind.St. IX 314: “so auch ABC. und MÜLLER”. → 翻訳 n.26。

*eṣa panthā vitato devayāno*  
*yenākramante putriṇo ye viśokāḥ |*  
*taṃ paśyanti paśavo vayāṃsi*  
*tasmāt te mātṛāpi mithunaṃ caranti ||*  
 (G9<sup>a</sup>: AB G11 の Parallele)<sup>6</sup>

|| *iti.* ||17|| (G10)

$$\left. \begin{array}{l} \\ \\ \\ \end{array} \right\} \rightarrow \text{G9}^a$$

## VII 14

1 *athainam uvāca*. varuṇaṃ rājānam upadhāva. putro me jāyatām. tena tvā yajā iti. 2 tatheti. sa varuṇaṃ rājānam upasasāra. putro me jāyatām. tena tvā yajā iti. tatheti. tasya ha putro jajñe rohito nāma. 3 taṃ hovācājani vai te putro. yajasva māneneti. sa hovāca. yadā vai paśur nirdaśo bhavaty atha sa medhyo bhavati. nirdaśo nv astv. atha tvā yajā iti. tatheti. 4 sa ha nirdaśa āsa. taṃ hovāca. nirdaśo nv abhūd. yajasva māneneti. sa hovāca. yadā vai paśor dantā jāyante 'tha sa medhyo bhavati. dantā nv asya jāyantām. atha tvā yajā iti. tatheti. 5 tasya ha dantā jajñire. taṃ hovācājñata vā asya dantā. yajasva māneneti. sa hovāca. yadā vai paśor dantāḥ padyante 'tha sa medhyo bhavati. dantā nv asya padyantām. atha tvā yajā iti. tatheti. 6 tasya ha dantāḥ pedire. taṃ hovācāpatsata vā asya dantā. yajasva maneneti. sa hovāca. yadā vai paśor dantāḥ punar jāyante 'tha sa medhyo bhavati. dantā nv asya punar jāyantām. atha tvā yajā iti. taheti. 7 tasya ha dantāḥ punar jajñire. taṃ hovācājñata vā asya punar dantā. yajasva māneneti. sa hovāca. yadā vai kṣatriyaḥ *samṇāhuko bhavaty* 'tha sa medhyo bhavati. samṇāhaṃ nu prāpnōtv. atha tvā yajā iti. tatheti. 8 sa ha samṇāhaṃ *prāpat*. taṃ hovāca. samṇāhaṃ nu *prāpnod*. yajasva māneneti. sa tathety uktvā putram *āmantrayām āsa*. tatāyaṃ vai mahyaṃ tvām adadād. dhanta tvayāham imaṃ yajā iti. 9 sa ha nety uktvā dhanur ādāyāraṇyam *apātasthau*. sa samvatsaram araṇye cacāra. ||14||

## VII 15

1 atha haikṣvākaṃ varuṇo jagrāha. tasya hodaraṃ jajñe. tad u ha rohitaḥ śuśrāva. so 'raṇyād grāmam eyāya. tam indraḥ puruṣarūpeṇa paryetyovāca. ||

nānā śrāntāya śrīr asti-  
 ṛti rohita śuśruma |  
 pāpo *nṛṣadvāro* jana



*sa hovāca. | sa vai me brūhi yathā me putro jāyeyeti. |*  
*taṃ hovāca. | varuṇaṃ...*

*saṃnāhaṃ prāpnoty*  
*prāṇa.*  
*prāṇat.*  
*āmatrayāṃ cakre*  
*upātasthau. |*

paryetyovāca. ||18||

*niṣadvaro*

indra ic carataḥ sakhā. (G12)

*caraiveti.* 2 caraiveti vai mā brāhmaṇo 'vocaḍ iti ha dvitīyaṃ saṃvatsaram  
araṇye cacāra. so 'raṇyād grāmam eyāya. tam indraḥ puruṣarūpeṇa  
paryetyovāca.

puṣpiṇyau carato jaṅghe  
bhūṣṇur ātmā *phalagrahiḥ* |  
*śere* 'sya sarve pāpmānaḥ  
śrameṇa prapathe hatāś. (G13)

*caraiveti.* 3 caraiveti vai mā brāhmaṇo 'vocaḍ iti ha | tṛtīyaṃ saṃvatsaram  
araṇye cacāra. so 'raṇyād grāmam eyāya. tam indraḥ puruṣarūpeṇa  
paryetyovāca.

āste bhaga āśīnasyo  
-urdhvas tiṣṭhati tiṣṭhataḥ |  
śete nipadyamānasya  
carāti carato bhagaś. (G14)

*caraiveti.* 4 caraiveti vai mā brāhmaṇo 'vocaḍ iti ha | caturthaṃ  
saṃvatsaram araṇye cacāra. so 'raṇyād grāmam eyāya. tam indraḥ  
puruṣarūpeṇa paryetyovāca. |

kalīḥ śayāno bhavati  
saṃjihānas tu dvāparaḥ |  
*uttiṣṭhaṃs\** tretā bhavati  
kr̥taṃ sampadyate caraṃs\*. (G15)

*caraiveti.* 5 caraiveti vai mā brāhmaṇo 'vocaḍ iti ha | pañcamam

*caraiva rohiteti.* |

ここに G14:

*phalegrahiḥ*

*śerate*

*caraiva rohiteti.* |

ここに G15

*caraiva rohiteti.*

ここに G13:

*utthitas*

*caraiva rohiteti.*

saṃvatsaram araṇye cacāra. so 'raṇyād grāmam eyāya. tam indraḥ  
puruṣarūpeṇa paryetyovāca. |

caran vai madhu vindati  
caran *svādum* udumbaram |  
sūryasya paśya *śremāṇam*  
yo na tandrayate carams\*. (G16)

caraiyeti. 6 caraiyeti vai mā brāhmaṇo 'voca iti ha | ṣaṣṭhaṃ saṃvatsaram  
araṇye cacāra.

so 'jigartaṃ sauyavasim ṛṣim *aśanayāparitam* araṇya upeyāya.

7 tasya ha trayaḥ putrā āsuḥ śunaḥpucchaḥ śunaḥśepaḥ śunolāṅgūla iti.  
taṃ hovāca. *ṛṣe 'haṃ te śataṃ dadāmy. aham eṣāṃ ekenātmānaṃ niṣkrīṇā*  
*iti.* sa jyeṣṭhaṃ *putraṃ* nigṛhṇāna uvāca. na nv imam iti. no evamam iti  
kaniṣṭhaṃ mātā. tau ha madhyame sampaḍayāṃ cakratuḥ śunaḥśepe.

*pakvam*  
*śramaṇaṇ*

... cacāra. | so 'raṇyād grāmam eyāya. | tam indraḥ puruṣarūpeṇa paryetyo-  
vāca. |

*caran vai madhu vindat*<sub>3</sub>  
*apacinvan parūṣakam* |  
*utthiṣṭhan vindate śriyaṃ*  
*na niṣat kiṃ canāvati* || G16a

*caraiva rohiteti.* | *caraiveti vai brāhmaṇo 'vacad iti* | *sa saptamam*  
*saṃvatsaram aranye cacāra.*|  
... ṛṣim aśanāyāpāritam putram<sup>+</sup> bhakṣyamāṇam<sup>8</sup> aranyam upeyāya. ||19||

*ṛṣe hantāham eṣāṃ ekenātmānam niṣkrīṇā aham te gavām śatam dadānīti.* |  
*sa jyeṣṭham nigṛhṇāna uvāca.* |

---

<sup>8</sup> Ed. *bhakṣamāṇam*. HILLEBRANDT 269: “C G *prakṣamāṇam*. This is in G corrected to *pakṣyamāṇam* and again to *bhakṣyamāṇam*; B Bs and Dr. Streiter *bhakṣyamāṇam*. I think that Dr. Streiter is right in maintaining that these words *putram bhakṣamāṇam* have originally been a mere gloss. They are not found in the version of the Aitareya Brāhmaṇa”. Cf. Gorō I. Prās. 2.Aufl., Verbess. p.4 zu 222 n.469. → 翻訳 n.51.

tasya ha śataṃ dattvā *sa* taṃ ādāya so 'raṇyād grāmam eyāya. 8 sa pitaraṃ etyovāca. tata hantāham anenātmānaṃ niṣkrīṇā iti. *sa* varuṇaṃ rājānaṃ *upasasārānena* tvā yajā iti. tatheti. *bhūyān* vai brāhmaṇaḥ kṣatriyād iti *varuṇa uvāca*. tasmā etaṃ rājasūyaṃ yajñakratuṃ provāca. tam etaṃ abhiṣecanīye puruṣaṃ paśum ālebhe.

## VII 16

1 *tasya ha viśvāmitro hotāṣij jamadagnir adhvaryur vasiṣṭho brahmāyāsyā udgātā*. tasmā upākṛtāya niyoktāraṃ na vividuḥ. sa hovācājigartaḥ sauvasir. mahyam aparaṃ śataṃ dattāham enaṃ niyokṣyāmīti. tasmā aparaṃ śataṃ dadus. taṃ sa *niniyoja*. 2 tasmā upākṛtāya niyuktāyāpṛitāya<sup>9</sup> paryagnikṛtāya *viśastāraṃ* na vividuḥ. sa hovācājigartaḥ sauvasir. mahyam aparaṃ śataṃ dattāham enaṃ viśasiṣyāmīti. tasmā aparaṃ śataṃ daduḥ. so 'siṃ *niḥśāna* eyāyā (3) tha ha śunaḥsepa *ikṣāṃ cakre*. 'mānuṣam iva vai mā viśasiṣyanti. hantāham devatā *upadhāvāmīti*. sa prajāpatim eva prathamam devatānām upasasāra. <kasya nūnaṃ katamasyāmṛtānām> ity etayarcā. 4 tam prajāpatir uvācāgnir *vai devānām nediṣṭhas*. tam evopadhāveti. so 'gnim upasasārā <gner vayaṃ prathamasyāmṛtānām> ity etayarcā. 5 tam agnir uvāca. savitā vai prasavānām īse. tam evopadhāveti. sa savitāraṃ upasasārā <bhi tvā deva savitar> ity etena tṛcena. 6 taṃ savitovāca. varuṇāya vai rājñe niyukto 'si. tam evopadhāveti. sa varuṇaṃ rājānaṃ upasasārāta uttarābhir ekatrimśatā\*. 7 taṃ varuṇa uvācāgnir vai devānām mukhaṃ *suhṛdayatamas*. taṃ nu stuhy. atha tvotsrakṣyāma iti. so 'gnim tuṣṭāvāta uttarābhir dvāvimśatyā\*. 8 tam agnir uvāca. viśvān nu devān stuhy. atha tvotsrakṣyāma iti. sa viśvān devāms\* tuṣṭāva. <namo mahadbhyo namo arbhavebhy> ity etayarcā. 9 taṃ viśve devā ūcur. *indro vai devānām ojiṣṭho baliṣṭhaḥ sahiṣṭhaḥ sattamaḥ pārayiṣṇutamas*. taṃ nu stuhy. atha tvotsrakṣyāma iti. sa indraṃ tuṣṭāva. <yac cid dhi satya

<sup>9</sup> AUFRECHT *āpṛitāyā*.

sa 欠

sa tathety uktvā varuṇaṃ rājānam āmantrayāṃ cakre. | anena tvā yajā iti. |  
tatheti. | śreyān vai brāhmaṇaḥ kṣatriyād iti. |  
varuṇa uvāca 欠  
ālebhe. ||20||

tasya ha viśvāmitro hotāsāyāsya udgātā jamadagnir adhvaryur vasiṣṭho  
brahmā. |

niyuyoja. | tasmā upākṛtāya niyuktāya (āprītāya 欠) paryagnikṛtāya  
viśāstāraṃ na vividuḥ. |

niśyāna ikṣām āsa. |  
ahaṃ 欠 ... upadhāvānīti. ||21||

agner vai nediṣṭho 'si. |

uvāca. | agnir vai...  
suhṛdayaṃ<sup>10</sup> tvotsrakṣyāmīti. |

tvotsrakṣyāmīti. |  
ūcuḥ |  
indram nu stuhy. atha tvotsrakṣyāma iti. |

---

<sup>10</sup> HILLEBRANDT 269: "Streiter *suhṛdayas* (5); Aufrecht (Ait. Brāhm.) *suhṛdayata-*  
*mas* A B *suhṛdayaṃs tan nu* [おそらく, STREITER の M.b.] C D Bs *suhṛdayas taṃ nu*  
G *suhṛdayas tan na*".

somapā) iti caitena sūktenottarasya ca pañcadaśabhis. 10 tasmā indraḥ stūyamānāḥ *prīto* manasā hiraṇyārathaṃ dadau. tam *etayā* pratīyāya. <śaśvad indra> iti. 11 tam indra uvācāśvinau nu stuhy. atha *tvotsrakṣyāma iti*. so 'śvinau tuṣṭāvāta uttarena tṛcena. 12 tam aśvinā ūcatur. uṣasaṃ nu stuhy. atha *tvotsrakṣyāma iti*. sa uṣasaṃ tuṣṭāvāta *uttareṇa* tṛcena. 13 tasya ha sma rcyṛcy uktāyām *vi* pāśo mumuce. kaniya aikṣvākasyodaram *bhavaty. uttamasyām evarcy* uktāyām *vi* pāśo mumuce. 'gada aikṣvāka *āsa*. ||16||

## VII 17

1 tam ṛtvija ūcus. tvam eva *no* 'syāhnaḥ saṃsthām *adhigacchety*. atha *haitaṃ śunaḥśepo 'ñjaḥsavaṃ* dadarśa.

*tam etābhiś catasṛbhir abhisuṣāva*. <yac cid dhi tvam ḡṛheḡṛha> *ity*.

*athainam dronakalaśam abhyavanināy*<occhiṣṭaṃ camvor bhare>*ty etayarcā*.

*a*tha hāsminn anvārabdhe pūrvābhiś catasṛbhiḥ *sasvāhākārābhir* juhavām cakārā.

*a*thainam avabhṛtham abhyavanināya. <tvam *no agne varuṇasya vidvān*> *ity etābhyām*.

*athainam ata ūrdhvam agnim āhavanīyam upasthāpayām cakāra* <śunaś cic chepaṃ niditaṃ sahasrād> *ity*.

2 atha ha śunaḥśepo viśvāmitrasyāṅkam āsāda. *sa* hovācājigartaḥ sauyavasir. ṛṣe punar me putraṃ dehiti. neti hovāca viśvāmitro. devā vā imam mahyam arāsateti. *sa* ha devarāto vaiśvāmitra āsa. *tasyaite kāpileyabābhra-vāḥ*. 3 *sa* hovācājigartaḥ<sup>11</sup> sauyavasis. *tvam v ehi* vihvayāvahā *iti. sa* *hovācājigartaḥ sauyavasir*.

āṅgirasō janmanāsṛ

<sup>11</sup> AUFRECHT *hovācājigartaḥ*.



*prīto* 欠 *etayarcā*

°*sraḥsyāmīti*. |

°*sraḥsyāva iti*. | *uttareṇaiva* ṛcena. |

*nitarām*<sup>12</sup> pāšo mumuce.

*babhūva*. | *uttamāyām ha smarcy uktāyām* vi pāšo mumuce. 'gada aikṣvāko

*babhūva*. |

*atha hainam* ṛtvija ūcuḥ. | *tvam evaitasyāhnaḥ saṁsthām adhigaccheḥ*. ||22||

*atha hainam aṇjaḥsavaṁ śunaḥśeṇo* dadarśa. |

〈*yac cid dhi tvam gr̥hegr̥ha*〉 *iti tam etābhiś catasṛbhir abhiṣutyo-*

〈*-cchiṣṭam camvor bhare*〉 *ti droṇakalaśe samavanināya*. |

*athāsminn* anvārabdha *etasyaiva sūktasya* pūrvābhiś catasṛbhir juhavām cakāra. |

*atha hainam* avabhr̥tam abhyavanināya 〈*sa tvam no agne 'vamas*〉 〈*tvam no agne varuṇasya vidvān*〉 *ity etābhyām ṛgbhyām*. |

*atha hainam* agnim *upasthāpayām āsa* 〈*śunaś cic chepaṁ niditaṁ sahasrād*〉 *ity etayārcā*. ||23||

*viśvāmitrasyopastham āsasāra*. | *taṁ* hovācā...

*ṛṣe* 欠

*vaiśvāmitra āsa*. |

*taṁ* hovcājigartaḥ sauyavasīḥ. | *taṁ vai* vihvayāvahā *iti*. | *tatheti*. |

<sup>12</sup> 先行箇所異読: HILLEBRANDT 269: "B D C (by alter.) *smarcy uktāyām* A C (orig?) G (orig.) Bs and Streiter *smarcyrcy uktāyām*".

ājigartih śrutah kaviḥ |  
 r̥ṣe paitamahāt tantor  
 māpagāḥ punar ehi mām. (G17)

iti. sa hovāca śunaḥśepo.

'*a*darśus tvā śāsahastaṃ  
 na yac chūdreṣv *alapsata* |  
 gavāṃ trīṇi śatāni tvam  
 avṛñithā mad aṅgira. (G18)

iti. 4 sa hovācājigartaḥ sauyavasis.

tad vai mā tāta tapati  
 pāpaṃ karma mayā kṛtam |  
 tad ahaṃ *nihnave* tubhyam  
 pratiyantu śatā gavām. (G19)

iti. sahovāca śunaḥśepo.

yaḥ sakṛt pāpakaṃ kuryāt  
 kuryād *enat* tato 'param |  
*nāpāgāḥ* śaudrān nyāyād<sup>13</sup>  
 asaṃdheyam tvayā kṛtam. (G20)

ity. 5 asaṃdheyam *iti* ha viśvāmitra upapapāda. *sa hovāca viśvāmitro*.

bhīma eva sauyavasiḥ

<sup>13</sup> *nāpāgāḥ śaudrān nyāyāt* または *nāpāgāḥ śaudrān n<sub>i</sub>yāyāt*.

*adrākṣus*

*alipsata*<sup>14</sup>

*nihnuve*

*enas*（異読あり，cf. HILLEBRANDT p.269）

*māṇagāḥ*

*iti vā avocad iti* ha viśvāmitra upapapāda. ||24|| *sa...* Ś 欠

---

<sup>14</sup> HILLEBRANDT 269: “A Bs and Streiter *alapsata* B C D G *alipsata*.” ただし，STREITER の *alapsata* の読みは写本 A B に基づく（“M.b. *alipsata*”）。*alapsata* は Bhāṣya p.337. Z.14 にもあり。

sāsena *viśiśāsīṣuḥ* |  
 asthān maitasya putro bhūr  
 mamaivopehi putratām (G21)

iti. 6 sa hovāca śunaḥśepaḥ.

sa vai yathā no *jñāpāyā*  
 rājaputra tathā vada |  
 yathaiv<sub>a</sub>āṅgirasah sann  
 upeyām tava putratām (G22)

iti. sa hovāca viśvāmitro.

jyeṣṭho me tvaṃ putrāṇām syās  
 tava śreṣṭhā prajā s<sub>i</sub>yāt |  
 upeyā daivaṃ me dāyam  
 tena vai tvopamantraya (G23)

iti. 7 sa hovāca śunaḥśepaḥ.

*saṃjñānāneṣu* vai *brūyāt*  
*sauhārd<sub>i</sub>yāya*<sup>15</sup> me śriyai |  
 yathāham *bharataṣabho-*  
<sub>u</sub>peyām tava putratām (G24)

ity. atha ha viśvāmitraḥ putrān *āmantrayām āsa*.

madhucchandāḥ śṛṇotana

---

<sup>15</sup> AUFRECHT *sauhardyāya*.

*viśiśāsiṣat*

*jñāṇa*ya (HILLEBRANDT “All MSS.”)

rājaputra (“A (orig.) B *rājaputraṃ*”)

°mantraye. ||

iti. | sa...

*saṃjānāneṣu vai brūyāḥ* (A B C G °yāt)

*sauhārdāya*

*bharataṣabho*-<sup>16</sup>

*āmantrayām cakre.* ||25||

---

<sup>16</sup> G25ab は *śṛṇotanaṣabho* と RV の「正書法」に従っている。ここも *bharataṣabho* が求められるか。

ṛṣabho reṇur aṣṭakaḥ |  
 ye ke ca bhrātaraḥ *sthanā-*  
 a<sub>5</sub>mai jyaiṣṭhāya *kalpadhvam* (G25)

iti. ||17||

VII 18.1 tasya *ha viśvāmitrasya*ikaśataṃ putrā āsuḥ. pañcāśad eva  
 jyāyāṃso\* madhucchandasah. pañcāśat kaniyāṃsas\*. 2 tad ye jyāyāṃso\* na  
 te kuśalaṃ menire. tān anuvyājahārāntān vaḥ prajā bhakṣiṣṭeti. ta ete  
 'ndhrāḥ puṇḍrāḥ śabarāḥ *pulindā mūtibā* ity *udantyā bahavo bhavanti*.  
 vaiśvāmitrā dasyūnāṃ bhūyuṣṭhāḥ.

3 *sa hovāca madhucchandāḥ pañcāśatā sārḍham*.

*yan* naḥ pitā saṃjānīte  
 tasmimś\* tiṣṭhāmahe vayam |  
*purāḥ tvā* sarve kurmahe  
 tvām anvañco vayam smasīty. (G26)

4 atha ha viśvāmitraḥ pratītaḥ putrāṃś\* tuṣṭāva.

5 te vai putrāḥ paśumanto  
*vīravanto* bhaviṣyatha |  
 ye mānaṃ me 'nugṛhṇanto  
 vīravantam akarta mā. (G27)

6 puraetrā vīravanto  
 devarātena gāthināḥ |  
 sarve rādhīyāḥ *stha* putrā  
 eṣa vaḥ *sadvivācanaṃ*. (G28)

*sthā*

asmai ... *tiṣṭhadhvam* ||

tasya *haikaśataṃ* putrā āsuḥ. |

*°āntaṃ*

*pulindā* 欠, *mūcipā iti*. | *udañco bahudasyavo*. vaiśvāmitrā dasyūnām

bhūyiṣṭhā *ity udāharanti*. |

*atha ye madhucchandaḥprabhṛtayaḥ kanīyāṃsas te kuśalaṃ menire*. | *sa ha jagau madhucchandāḥ*. |

*yaṃ*

*purastāt*

putrāṃs tuṣṭāva. ||26||

*paśumantaḥ*

*prajāvanto bhaviṣyatha* |

sarve rādhīyās *tu* putrā

eṣa vas *tad vivācanaḥ*. ||

- 7 eṣa vaḥ kuśikā vīro  
devarātas tam anvita |  
yuṣmānś\* ca dāyaṃ *ma upetā* (→ 翻訳 n.132)  
vidyāṃ yām *u ca* vidmasi. (G29)
- 8 te samyañco vaiśvāmitrāḥ  
sarve sākam sarātayaḥ |  
devarātāya tasthire  
*dhṛtyai śraiṣṭhyāya* gāthināḥ. || (G30)
- 9 *adhīyata* devarāto  
rikthayor ubhayor ṛṣiḥ |  
jahnūnām *cādhīpatye*<sup>17</sup>  
daive vede ca *gāthinām*. || (G31)
- 10 tad etat *paraṛkṣatagātham śaunaḥśepam ākhyānam*.
- 11 tad dhotā *rājñe* 'bhiṣiktāyācaṣṭe. 12 hiraṇyakaśipāv āsīna ācaṣṭe.  
hiraṇyakaśipāv āsīnaḥ pratigṛṇāti.  
*yaśo vai hiraṇyaṃ. yaśasaivainam tat samardhayaty*.
- 13 om ity ṛcaḥ pratigara. evaṃ tatheti gāthāyā. om iti vai daivaṃ. tatheti  
mānuṣaṃ. daivena caivainam tan mānuṣeṇa ca *pāpād enasaḥ pramuñcati*.  
14 tasmād yo rājā vijiti syād apy ayajamāna ākhyāpayetaivaitac chaunaḥśa-  
pam ākhyānam. na *hāsminn* alpaṃ canainaḥ pariśiṣyate. 15 sahasram  
ākhyātre *dadyāc*. chatam pratigaritra. ete caivāsane. *śvetaś cāśvatarīratho*  
*hotuḥ*. 16 putrakāmā hāpy *ākhyāpayeraṃ*<sup>18</sup> labhante ha putrān. (labhante  
ha putrān)<sup>19</sup> ||18||

<sup>17</sup> *jahnūnām cādhīpatye* または *jahnūnām cādhīpatye*。

<sup>18</sup> Ed.AUFURECHT, Ed.MALAVIYA *ākhyāpayeraṃ labhante*; Ed.Nirṇayasagar *ākhyāpa-  
yeranl labhante*.



“B C D G Bs (Orig.) *anvitaḥ*”  
 yuṣmāṃś ca dāyaṃ *coṭetām*  
*uta*

*jyaiṣṭhye śraiṣṭhye ca*

*adhīyate*

*cādhitaṣṭhire*  
*gāthināḥ. ||*

tad etac *chaunaḥśepam ākhyānaṃ paraḥśatargātham aparimitam. |*

Ś 欠

Ś 欠

*sarvasmād enasaḥ sampramuñcati. |*

*hy asminn*

Ś 欠      Ś 欠

*ākhyāpayante. | labhante ha putrān. (labhante ha putrān)<sup>19</sup> ||27||*

---

<sup>19</sup> 大段落の終わりを示す学習上の繰り返し，例えば，後藤『今西順吉教授還暦記念論集』（1996）850(99) n.8, Fs.Thieme (1996) 109 n.79 に参考文献などへの指示あり。

## Summary

Śunaḥśepa legend. A Japanese translation  
and annotation

Toshifumi Gotō

Śunaḥśepa legend (*Śaunaḥśepam*) brings us important materials about ancient India for understanding the language, society, and history of thought. There are many treatises on the topic in the history of research, cf. n.1. The present paper aims to offer a Japanese translation as faithful as possible to the original. Two versions are recorded in the texts belonging to the Rigveda: Aitareya-Brāhmaṇa VII 13-18 and Śāṅkhāyana-Śrautasūtra XV 17-27. Differences between them are not so large on the whole, but exist to some extent in the later prose portion, especially in the Aitareya-Brāhmaṇa from VII 17 onward and its parallel Śāṅkhāyana-Śrautasūtra from XV 22 (the last part) to the end. This legend should be recited by Hotar after consecration (*abhiṣeka*) in the *Rājasūya*, which needed recording in both the Rigvedic traditions. N. TSUJI's book *Tales in ancient India. From Brāhmaṇa literature*, Tokyo 1978, a selection of more than 32 legends from the Vedic prose with Japanese translation and annotation, treats this story at pp. 3-16. We can gain detailed and reliable information from it.

The present paper is based on materials prepared for my seminars held several times. It includes therefore information which is useful for the study of Vedic philology in general. I would like to express in this occasion my thanks to the students, more than 20, who took part and had discussions in the seminars.

After the Japanese translation with annotation, excursuses are added on the metre (2.), on the periphrastic perfect forms (3.), indices (4.), literature (5.), and the texts, set side by side, of the Aitareya-Brāhmaṇa and Śāṅkhāyana-Śrautasūtra (6.).

*Professor,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*